

### 3. ま と め

今回の調査では、中世から近世、近代に至る遺構・遺物が確認された。

第2遺構面で発見された礎石建物については、幕末頃の兵庫を描いた画集『兵庫古今』(若林秀岳画) 中の「七ノ宮社」に、社殿の東隣に宝珠を棟に載せた2×3間程度の仏殿らしい建物が描かれており、これがその建物にあたるのではないかと推定される。

また、元禄年間に作成された兵庫津絵図を見ると、七宮大明神と添書された社殿の横に真言宗神宮寺と書かれた建物が描かれている。ほぼその時期に該当する第5遺構面では、土堤状に土を積み上げて、土留めを造り、砂を盛っている。これは、平坦面を造るための造作であるが、それがどのように利用されたかは今回の調査では明らかにし得なかった。そのため元禄期の神宮寺については、当調査地内に存在した可能性を示唆するに止めた。

第7遺構面では、13世紀後半から16世紀頃のピット、土坑等を検出したが、湧水のため精査・図化等が困難であった。周辺の調査でも海拔-30cm前後レベルで当該時期の遺構・遺物を確認している。何故このような低いレベルで検出されるかについては、今後充分検討する必要があるが、想定し得るものとして、当時から現在に至る海水準の上昇や地震等の地殻変動による海岸部分の沈降現象などが挙げられる。

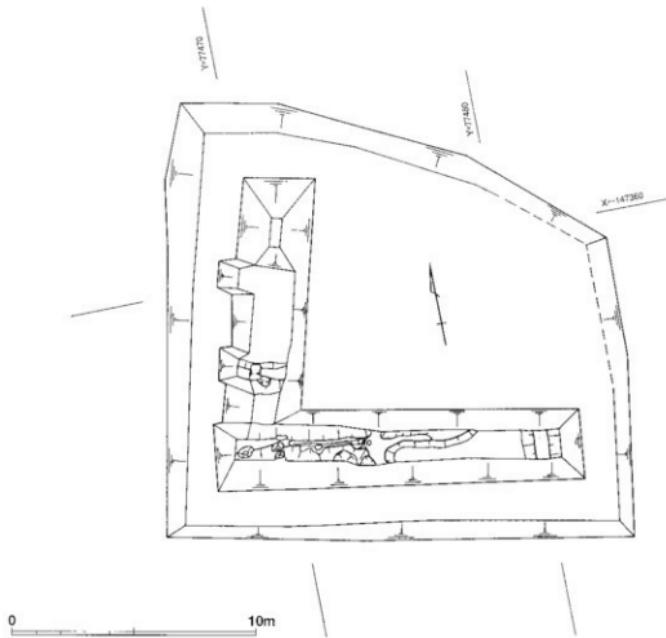


fig. 119 第5遺構面平面図

## ひょうごつ 15. 兵庫津遺跡 第22次調査

## 1. はじめに

兵庫津遺跡は、神戸市中央部の海岸部に位置する平安時代から江戸時代にかけての複合遺跡である。

これまでの調査では、中世から近世・近代の町割りと町家に関する遺構を確認しており、多くの成果を納めている。



fig. 120  
調査地位図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

調査前は、今回の調査地の南西で実施した第1次調査と同様に、弥生時代の河道などが検出されることが予想された。

**第1遺構面** 黄色細砂上面で検出した遺構面である。溝13条を検出した。時期は、室町時代末期頃のものと考えられる。

**溝** 幅20~40cmで、探さは30cm前後のものが中心である。方向はN41° Eを中心として、一定の方向に並んで掘削されており、鋤溝と考えられる。

**第2遺構面** 黄色細砂層を掘り下げた段階で、下層の灰褐色砂混シルト上面で検出した。

**畦畔** 水田畦畔を検出した。畦畔の方向は基本的に第1遺構面で検出した鋤溝の方向とほとんど違はない認められない。遺物から判断して、15世紀代のものと考えられる。

**第3遺構面** 灰褐色砂混シルト層を掘り下げた段階で、下層の暗黒褐色シルト上面で検出した。

**溝** 溝10条を検出した。時期としては、14世紀後半代のものと考えられる。

**溝** 幅20~40cmで、探さは10cm前後のものが中心である。方向はN40° Eを中心として、一定の方向に並んで掘削されており、鋤溝と考えられる。

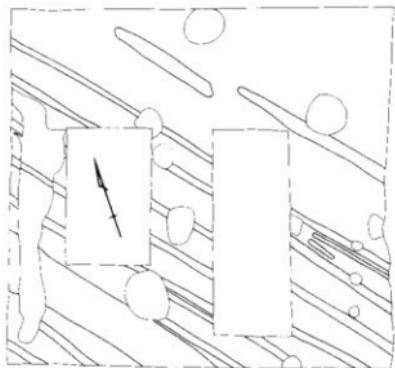
**第4遺構面** 暗黒褐色シルト層を掘り下げた段階で、下層の灰褐色細砂上面で検出した。

**溝** 溝2条のほか、湿地伏の落ち込みも検出した。時期は、14世紀前半代と考えられる。

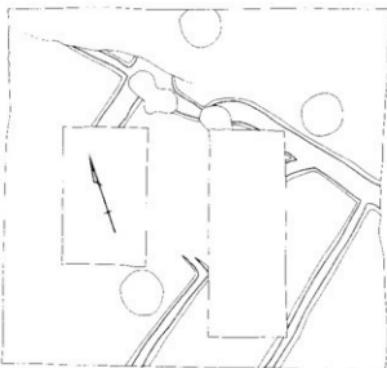
**溝** 幅10~50cmで、深さは10cm前後のものが中心である。方向はN40° Eを中心とする。耕作痕跡と考えられるが、湿地状の窪みが周辺に残るような状況であったと考えられる。

3. まとめ 今回の調査では、水田関連の遺構を検出した。これらの方向性はN40°Eを中心として存在しており、この方位は明治時代の地図にみられる条坊とほぼ一致している。第4遺構面で検出した動溝の存在から、これらの方向性は14世紀前半まで遡る可能性がある。

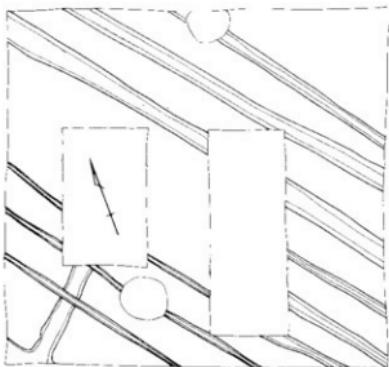
ただし、当調査地は下層の河道から弥生時代前期の遺物が出土していることから、周辺が陸地であったとみられるが、周辺はかなりの間、湿地であったと考えられており、周辺の方向性に合わせて新たに開発された可能性が高いものと考えられる。



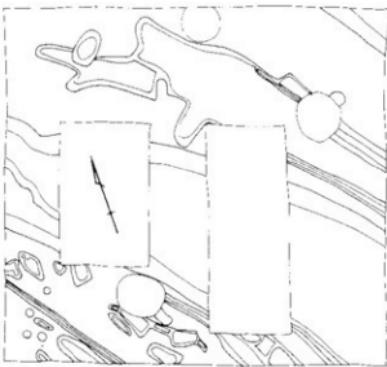
第1遺構面



第2遺構面



第3遺構面



第4遺構面



fig. 121 第1～4遺構面平面図

## 16. みかわぐち 遺跡

### 1. はじめに

三川口遺跡は、中世以来港町として栄えてきた、兵庫津遺跡の北側に隣接する遺跡である。今回の調査地については、平成10年度に実施した試掘調査において遺構・遺物を確認したことから、発掘調査を実施することとなった。



fig. 122  
調査位置図  
1 : 2,500

### 2. 調査の概要

調査は、残土搬出の都合により、2分割して実施した。東半分をI区、西半分をII区と呼称する。

#### 基本層序

現地表面以下の土層は、上層より、①盛土、②戦災に伴う焼土、③旧表土、④黄灰色砂(洪水砂)、⑤暗黒褐色シルトとなっている。

調査の結果、3面の遺構面を確認した。

#### 第1遺構面

②層を除去した段階で検出した遺構面である。戦災に伴う焼土層直下で検出していることから、戦災直前の時期の遺構と考えられる。

#### 検出遺構

検出した遺構は、当時の町割を示すもので、側溝を伴う道路遺構などである。

#### 側溝

石組の溝で、その底部に煉瓦を敷き並べている。道路を挟んだ反対側は側溝の底を示す煉瓦列のみ検出できた。これらの側溝から復元される道路の幅は3mである。

側溝とは別に、側溝に直交する煉瓦列を検出している。溝の底を示すものなのか、塙あるいは建物の基礎の一部を示すものなのかは明確にできない。

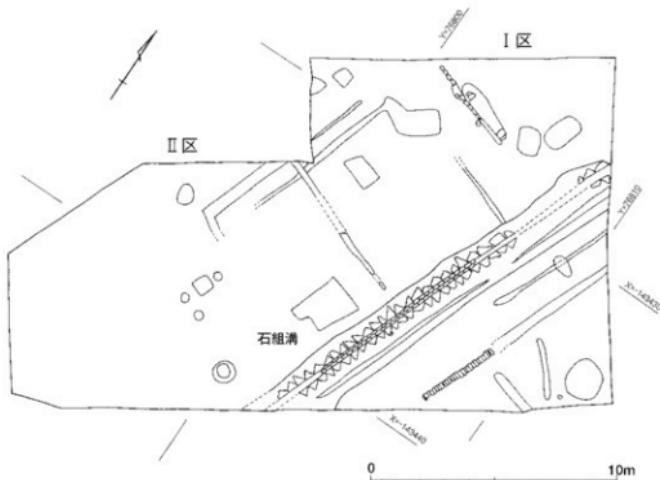


fig. 123  
第1造構面平面図

**第2造構面検出遺構** ③層の旧表土層を掘り下げる検出した造構面である。検出した造構は、鋤溝と竪の歓立てに伴う溝である。歓立てに伴う溝は、約1.2~1.4mの間隔で検出されており、鋤溝を切る。よって当地では水田から畠地に転作されたものと考えられる。

鋤溝・歓溝に伴う土器は、近世後半以降の陶磁器であり、造構の時期も近世後半以降と考えられる。ただし、鋤溝と歓溝の時期差は明確ではない。

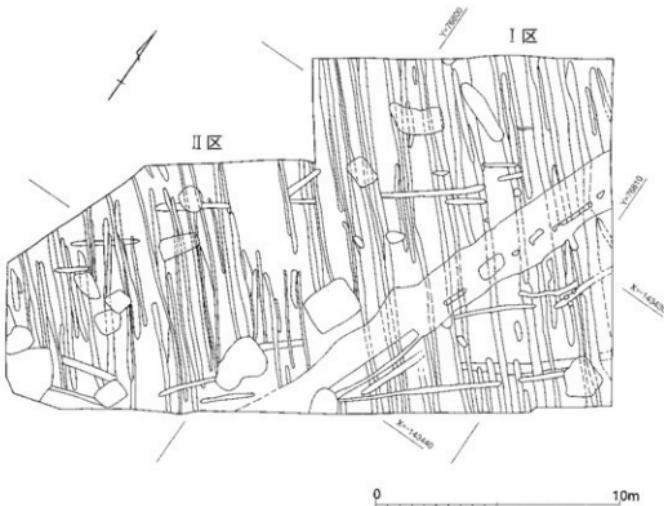


fig. 124  
第2造構面平面図



fig. 125  
第2遺構面全景

**第3遺構面** ④層の洪水砂を掘り下げて検出した遺構面である。調査地の東側では畠と水田を、西側では旧河道を検出している。

**旧河道** 東側の肩部のみを検出した。この肩部の方向から、ほぼ東西方向に流れていたものと考えられる。検出面からの深さは約70~80cmを測る。洪水により一気に埋没している。洪水砂からは、近世前半の備前焼、唐津焼、伊万里焼、瓦片等がわずかに出土している。これらの出土遺物から、この河道は近世前半に埋没したものと考えられる。

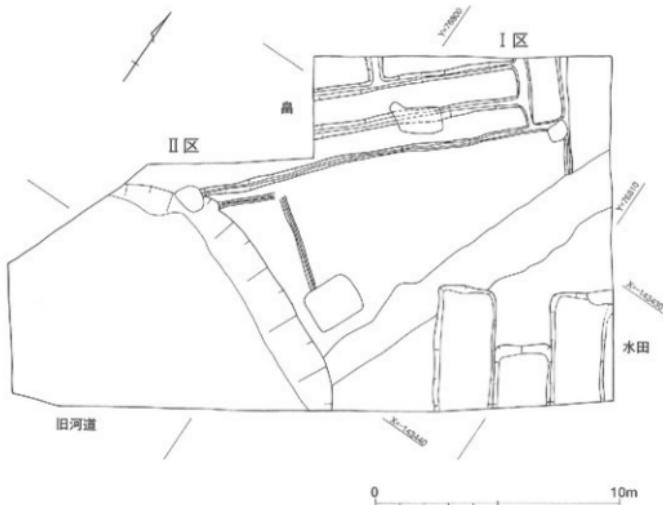


fig. 126  
第3遺構面平面図

fig. 127  
第3遺構面全景



島・水田 島と水田であるが、上記の旧河道を埋没させたものと同じ洪水砂によって覆われていた。そして、第3遺構面の基盤層となる⑤層は水田土壤層であり、上面において人間の足跡と稲株の可能性のある生痕化石を確認している。この水田土壤層の一部（北東部）に並行する溝を掘り島地化している一方で、南東部を約30cm掘り込み南北方向の畦畔を造り水田化している。しかし、水田面においては足跡は確認できたが、稲株痕は確認できなかった。また、水田面は水平とはなっておらず、起伏が顕著である。

3. まとめ 調査の結果、3面の遺構面を検出したが、当地は近世以降の遺跡であることが明らかとなった。このなかで、第3以降面で検出した水田と島が注目される。同じ洪水砂に覆われていることから、島と水田は同時期に存在したものと考えられ、中世以降関東地方を中心に多く見つかっている掘込田の一例ではないかと考えられる。しかも、①水田土壤に敵溝を掘り敵立てをしていること、②敵立てした付近の水田土壤層上面に足跡が多く認められること、③敵部分の土が十分土壤化していないこと、④掘込田の水田面の起伏があり土壤化していないことなどから判断して、水田であった一部を敵立てして島地化する一方で、一部を低く掘り下げて水田化しようとしたものと考えられる。そして、まさにその作業段階で洪水の被害にあったものと考えられる。

このほか、調査の過程で旧河道を掘削した結果、第3遺構面以下の土壤層を確認することができた。これによると、当地の近世以前の立地は、当地の南側で南北方向に延びる砂堆の後背湿地であったと考えられる。このことから、以下のように地形環境の変化とそれに対応した土地利用の変化を捉えることが可能となった。

まず、上記の後背湿地が完全に埋没しきらない近世前半の段階においては、水田として土地利用がなされていた（第3遺構面）。その後、後背湿地をほぼ埋没せしめた洪水砂（④層）によって、水田から島作への転換が図られている（第2遺構面）。その後市街地化されていった（第1面）。ただし、この時期については、明治20年陸軍測量局測図の1/20,000地形図をみると、当地は市街地化された範囲の縁辺部に位置し、当地において第1遺構面で検出されたような町並みとなったのはこの時期以降ではないかと考えられる。

## 17. 兵庫松本遺跡 第2次-1・2調査

### 1. はじめに

兵庫松本遺跡は、平成8年度に松本地区土地区画整理事業に伴う試掘調査で発見された遺跡である。

兵庫松本遺跡は、現在のところ、兵庫区松本通2丁目を中心とした南北約0.1km、東西約0.1kmの範囲に分布していると考えられる。

第1次調査では、弥生時代前期頃の自然流路、弥生時代後期後半から古墳時代前期前半頃の竪穴住居・掘立柱建物・土坑・自然流路、鎌倉時代後半頃の耕作痕等を検出している。

今回、松本地区土地区画整理事業地内において2回にわたる調査を実施した。



fig. 128  
調査地位置図  
1 : 2,500

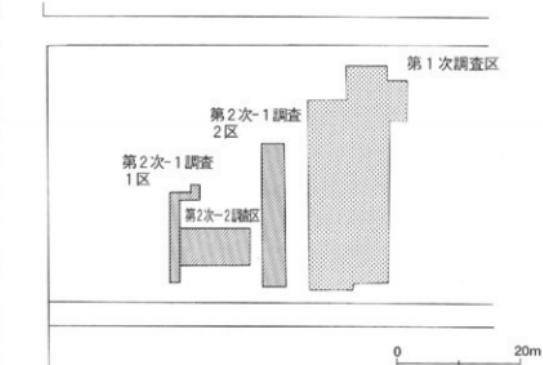


fig. 129  
調査区位置図



fig. 130 第2次-1調査1区落ち込み



fig. 131 第2次-1調査2区全景

2. 調査の概要 松本地区土地区画整理事業に伴って、擁壁工事による工事影響部分（1区）、松本28-2次-1 2号線道路部分（2区）の調査を実施した。

基本層序 1区基本層序は、上層から、現代盛土、旧表土、暗灰色砂質土（旧耕土）、暗黄灰褐色粘質土（旧床土）、黄灰褐色砂礫土、茶灰色シルト、茶褐色シルト、暗茶灰色シルトとなり、現地表下0.6m～1.0m（標高22.0m～22.3m）で、遺物包含層である暗茶褐色シルトに至る。その下層の淡褐色砂礫土上面が遺構面となっている。

2区では、上層から、現代盛土、旧表土、暗灰色砂質土（旧耕土）、暗黄灰褐色粘質土（旧床土）、暗茶灰色シルト、淡褐色土となっている。

淡褐色砂礫土上面は、第1次調査時の第2遺構面に相当しており、第1次調査で検出された第1遺構面については、近現代の建物等の攪乱による削平のため、遺構面の遺存状況も悪く、遺構も確認されなかった。

1区 1区では、弥生時代後期から古墳時代前期頃の落ち込み1ヶ所を検出した。

落ち込み 調査区外に延びているため全体の規模は不明であるが、東西2.4m以上、南北2.4m以上、深さ20～30cmを測る。弥生時代後期から古墳時代前期頃の土器が少量出土した。

遺構面調査完了後、1区南側で工事影響深度である現地表下-1.5m（標高約7.60m）まで断ち割り調査を実施した。その結果遺構は検出されず、遺物は少量出土したが、流入によるものと考えられる。

2区 調査区の大半が、自然流路内にあたっている。

S R01 調査区北側から約7.0～8.5mで流路の北肩部を検出した。調査区内で南側の肩部を検出していないため、全体の規模は不明である。調査区内での規模は、幅15.0～16.5m、深さ0.4～1.2mを測る。

このS R01は、第1次調査検出のS R01と同一の流路と考えられる。

調査区の幅が狭いため、第1次調査で確認した弥生時代前期の遺物包含層の深度までは掘削を行わず、現地表下2.5m（標高約2.90m）まで掘削を実施した。

北肩部周辺より、弥生時代後期から古墳時代前期頃の土器が多量に出土している。



fig. 132 第2次-2調査区全景



fig. 133 第2次-2調査区SR01断面

**2次-2** 基本層序は、上層から、現代盛土、旧表土、暗灰色砂質土（旧耕土）、暗黄灰褐色粘質土（旧床土）、黄灰褐色砂礫土、茶灰色シルト、茶褐色シルト、暗茶灰色シルトとなり、現地表下0.6～1.0m（標高22.0～22.3m）で、遺物包含層である暗茶褐色シルトに至る。暗茶褐色シルトの下層の淡褐色砂礫土上面が遺構面となっている。

調査区南側では、上層から、暗灰色砂質土（耕土）、暗黄灰褐色粘質土（床土）、暗茶灰色シルト、淡褐色砂礫土となっている。

弥生時代後期から古墳時代前期頃の土坑1基、自然流路1条を検出した。

第1次調査で検出された第1遺構面は、近現代の建物等の攢乱により削平されており、遺構面の遺存状況も悪く、また、遺構も確認されなかった。

**S X01** 長径1.0m×短径0.9m、深さ50～70cmを測る、平面形が橢円形の土坑である。

**SR01** 北東から南西方向に流れる自然流路で、調査区内での規模は、幅9.5～10.5m、深さ0.4m～0.6m以上を測る。これは、第1次調査区及び第2-1次調査の1区・2区で検出された自然流路（SR01）に続くものと考えられる。今回は、工事影響深度が、現地表下2.0m（標高約8.00m）であるため、第1次調査で確認された弥生時代前期の遺物包含層までは到達しなかった。

北肩部周辺より、弥生時代後期から古墳時代前期頃の土器が多量に出土している。

これまでの成果より、SR01は、全長35.0m以上、幅8.0m～15.0m以上、深さ0.5m～1.0m以上と推定される。

**3. まとめ** 今回の調査は、第1次調査区の隣接地であったため、第1次調査と同時期の遺構が検出された。

出土遺物の整理が未了であるため、検出遺構の詳細な時期については、明確でないが、第1次調査時と同様、概ね弥生時代後期から古墳時代前期頃（3世紀末から4世紀初頭頃）に属するものであると考えられる。

今後、出土遺物の整理が進むにつれ、詳細が判明していくであろう。

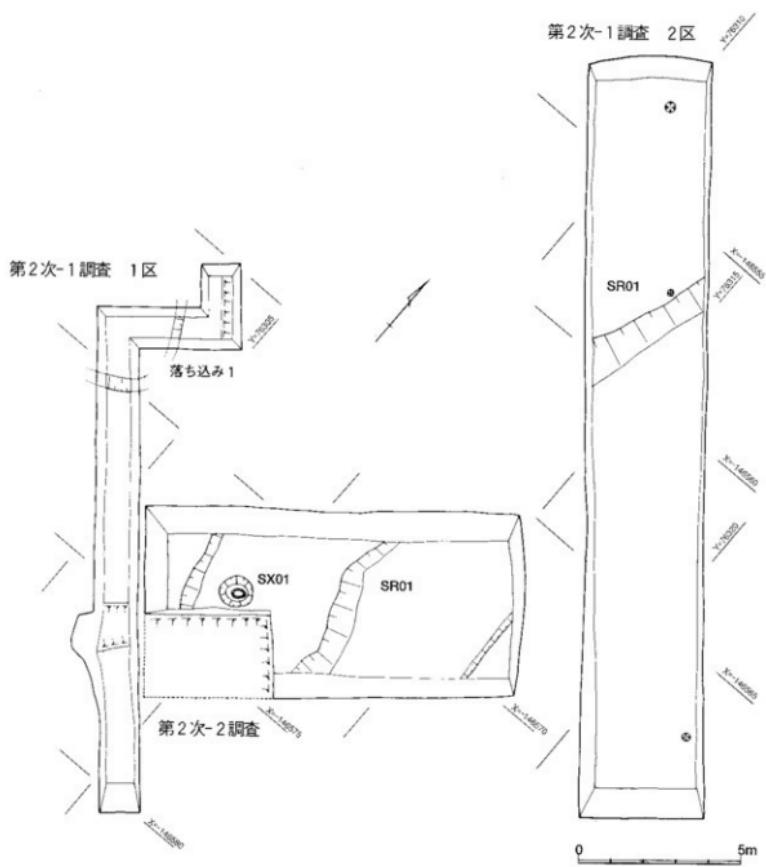


fig. 134 第2次-1・2調査区平面図

## つか もと 18. 塚本遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

塚本遺跡は旧渋川右岸の沖積地、JR兵庫駅の北付近に位置する。

平成4年に遺跡の存在が確認され、これまでに2回の発掘調査を実施しており、①近世から近代（耕作地）、②平安時代末（土坑群）、③弥生時代前期から中期（溝・土坑）と3面の遺構面を確認している。



### 2. 調査の概要

今回の調査は、集合住宅建設に先立ち、工事の影響を受ける約50m<sup>2</sup>について、工事影響深度まで実施したものである。調査の結果、3面の遺構面とそれに対応する遺物包含層を確認した。

#### 基本層序

1938年の阪神大水害時によって埋没した畠層の下層で、現地表面（工事G L）下約1.0mで第1遺構面（3a層上面）、同約1.2mで第2遺構面（4a層上面）、同約1.3mで第3遺構面（5a層下面）が確認された。工事影響深度に達したため、これ以下については面的な調査を行っていないが、一部について地表面下約1.7mまで断ち割り調査を行った。この結果、第4遺構面以下約1.7mまでは砂と土壤化した砂混じりのシルトの互層となっていて、遺物等の出土はみられなかった。

**第1遺構面** 2b層は洪水の泥水が堆積した土層で、これに覆われる江戸時代の耕作地が検出された。

**検出遺構** 確認した遺構は畠および水路である。

**S D01** 幅約2m、深さ約60cmを測る水路である。右岸には杭列が打たれているが、左岸にはみられない。杭は径5~7cmの丸杭で、70~90cmほど打ち込まれている。多量の陶磁器類・瓦類・木製品が出土している。



fig. 136 SD01

**第2遺構面** 4a層上面で確認された遺構面である。偶蹄目=牛の足跡が少数検出されたに止まり、顯著な遺構は確認されなかった。

**第3遺構面** 5a層上面ないし下面で確認した遺構面である。粘土探掘坑と考えられる土坑、不整形検出遺構の落ち込み、小土坑等を検出した。5a層ならびに遺構から出土する遺物は小片のみで、時期的な判断は困難であるが、平安時代末頃のものである可能性が高い。

**粘土探掘坑** SK15・16・19・20等は径2m程度の不整形な土坑で、互いに接するような位置関係にある。これらは黒色粘土の6a層および明緑灰色粘土の6b層を掘り込むが、その下の砂層に達する直上で底面となる。埋土は埋め戻されたことが明瞭で、5a層の土に6a・6b層のブロックが5%程度混じる。このような状況から、以上の土坑は6b層の粘土を探掘するための、いわゆる粘土探掘坑であると判断される。SX01なども同様の遺構であろう。



fig. 137 粘土探掘坑

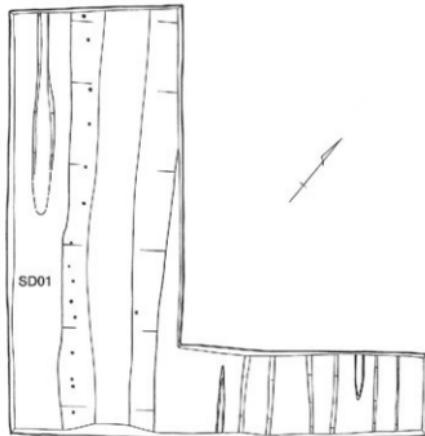


fig. 138  
第1遺構面平面図

3. まとめ 今回の調査では、工事影響範囲内で3面の遺構面を確認した。沖積地という性格上、洪水分によって截然と区分できる遺構面が多数確認される可能性が考えられたが、それを実証する結果となった。

確認した遺構では、第3遺構面の粘土採掘坑が注目される。塚本遺跡は今回が3回目の調査であり、遺跡の性格等も明らかでない点が多いが、周辺の調査が進めば、ここで採掘した粘土で何を生産していたのか解明される可能性がある。第2次調査では同じ平安時代末頃の馬の埋葬土坑など興味深い遺構も確認しており、これらの性格を明確にする情報を得るためにも、今後の調査の成果が期待される。

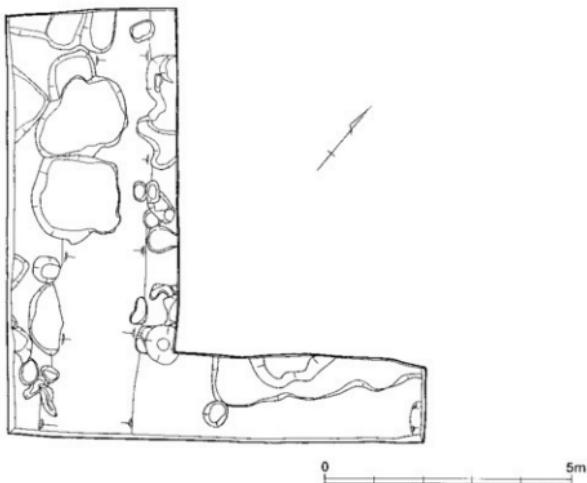
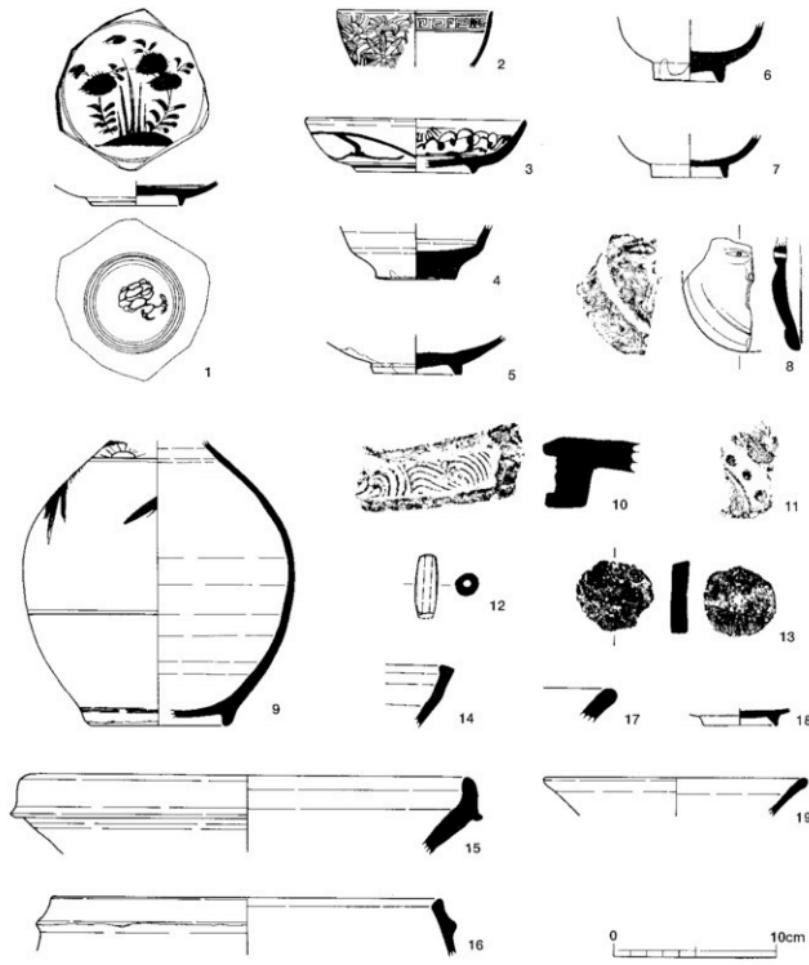


fig. 139  
第3遺構面平面図



fig. 140  
調査区西壁断面図



1~11 SD01  
12~16 3層  
17・18 4層  
19 SK10

fig. 141 出土遺物実測図

## かみ さわ 19. 上沢 遺跡 第32次-1・2 調査

### 1. はじめに

上沢遺跡は、六甲山系の会下山丘陵の南西に形成された扇状地上に立地している。震災以降、個人住宅建設や山手幹線拡幅工事に伴う調査が増加し、遺跡の様相が明らかになりつつある。これまでに実施した約30回に及ぶ既往の調査において、縄文時代晚期から中世に至る遺構が検出されているが、各時代によって集落の中心を変えていると思われる。近年の調査では、重圓文軒丸瓦や銅製帶金具等が出土し、奈良時代から平安時代の建物跡が多数検出されるなど、官衙などの公的施設の存在が窺われており、遺跡の性格についても変革期がある。

今回の調査は山手幹線拡幅工事に伴って実施したもので、第9次調査地の東隣に位置する幅8m、長さ67mの部分（第32次-1調査）と第9次調査地の南側の歩道部分（第32次-2調査）の調査である。

以下、その概要である。

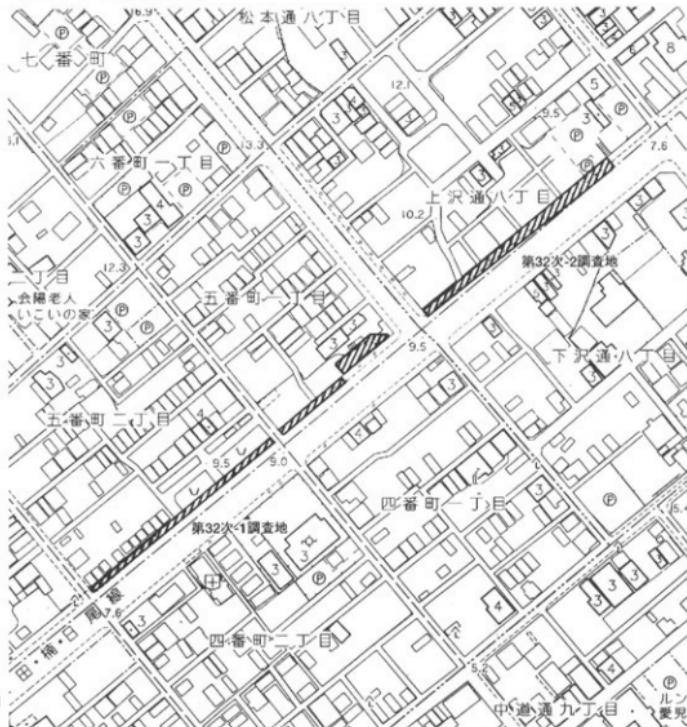


fig. 142  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 第32次-1調査

1. 調査の概要 今回の調査では、2面の遺構面を検出した。

**基本層序** 基本層序は、盛土、旧耕土の下層に、飛鳥時代から奈良時代の遺物包含層が調査地の東端と西半分に存在し、この下層が第1遺構面（弥生時代終末期から古墳時代前期及び古墳時代後期の遺物包含層上面）である。ただし、弥生時代終末期から古墳時代前期の遺物包含層は、調査地の東半部にあたる4～7区東端までに存在しており、以西では遺物の出土もなかった。第1遺構面基盤層（遺物包含層）の下層が第2遺構面となる。

調査は、実施可能な範囲から順次調査を開始したため、便宜的に1～14区の小調査区を設定して実施した。

**第1遺構面** 掘立柱建物6棟、流路2条、溝27条、小穴あるいは柱穴98基、水田、井戸1基（鎌倉時代）を検出した。

**検出遺構** 検出した遺構の時期は、井戸を除き概ね古墳時代後期終末から奈良時代のものと考えられる。検出面の標高は、最も東端の4区では、T.P.8.2mで、西端の14区ではT.P.7.15mと概ね東から西への緩やかな傾斜となっている。

**掘立柱建物** 検出した7棟の掘立柱建物は、棟方位によって、真北を基準に10～13度西へ振るSB01～06と、31度西へ振るSB07に分けることができる。それぞれの建物の規模や構造の概要是、以下のとおりである。

### 飛鳥時代掘立柱建物の概要

遺構名	桁行×梁間	規模〔桁行・梁間〕 〔柱穴間距離〕	構造	棟方位	備考
SB01	2間以上×1間以上	3.4m×2.5m以上 ( 1.7m・1.5m)	側柱	N10° W	SB02と同様に柱の抜取りの痕跡が認められた。
SB02	3間×2間	4.0m×3.0m (約 1m・1.5m)	側柱	N10° W	第9次調査調査検出のSB02の一部。柱抜取り痕検出。
SB03	2間×2間	3.0m×3.0m ( 1.5m・1.5m)	総柱	N10° W	北東隅の柱穴掘形の中位より鉄製品が出土。柱抜取り痕検出。
SB04	1間以上×1間以上	3.0m×3.0m以上 ( 1.7m・1.7m)	不明	N10° W	木製の礎板が存在していた可能性がある。
SB05	4間分の検出	8.4m以上 ( 2.1m)	不明	N13° W (北半)	第26次調査においては北へ続く柱穴は、検出されていない。
SB06	6間分の検出	北半部1.8～2.1m 南半部で1.8m	不明	N11° W (北半)	柵の可能性がある。地形に沿うためか、南半は西へ若干傾する。

**SB01・02** SB01・02で検出した柱穴は、一辺70cm前後、深さ60cmの方形の掘形のもので、埋土及び柱の沈み込みの痕跡の観察から、径18cmの柱が建てられていたことが窺える。柱穴掘形の埋土は、粘質土と砂質土を交互につき固めていた（版築）。柱痕跡内の埋土は軟弱で、上位が広がっており、建物廃絶に伴い柱材を抜き取った可能性がある。

**SB03** 北面の柱列の中央の柱穴と建物中央の束柱の間に溝が取りつくが、西面の柱列の様に、柱穴の一角を破壊して、溝状の掘削痕が取り付いている。掘削痕は柱痕跡側面及び底面に達している。掘削痕の埋土は、版築によって固く締まった柱穴掘形埋土に比して軟弱である。以上から柱穴に取り付く溝状の掘削痕は、柱を抜き取り痕跡である可能性が高い。

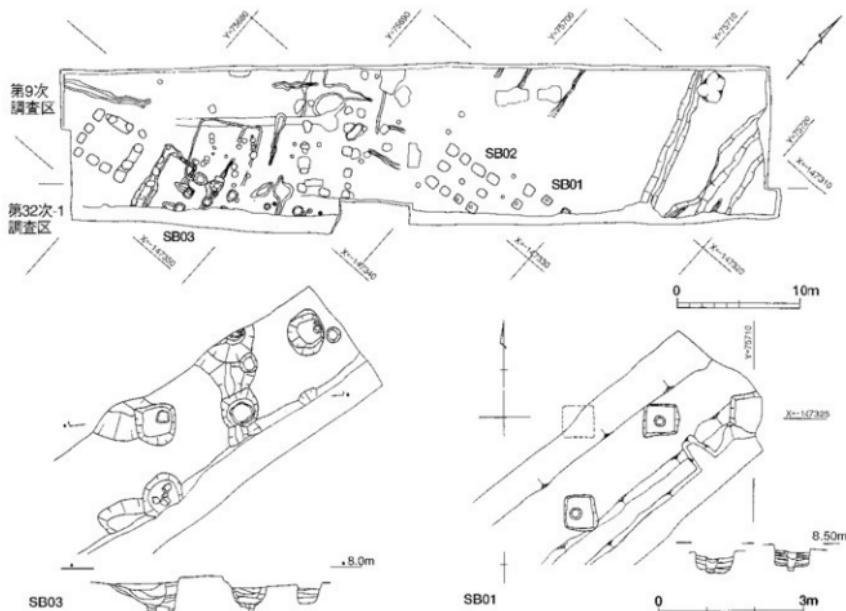


fig. 143 調査区平面図・SB01・03平・断面図

**S B07** 1区の西端で検出された。南北1間以上、東西2間以上の建物で大半が調査区外に位置している。調査区の北に隣接する第26次調査地において、同建物の一部が検出されている。柱穴からの出土遺物は、ほとんどなく、詳細な時期は明らかにできなかったが、第9・26次調査の成果から、奈良時代の建物である可能性が高い。

**溝・小溝** 検出された溝27条のうち、5条についてはその堆積状況や形状、規模などから建物や集落の排水、建物を画する溝などと考えられる。

他の溝の大半は細く、断面U字形の浅い溝で、溝底は凹凸が激しい。溝底に「U」字形の農耕具と考えられる痕跡が顕著に残る溝も存在することから、耕作痕跡と考えられる。

**S D10** 9区で検出した。第9次調査で大壁造り建物S B05の壁立ち部の囮み溝として検出された溝と同一の遺構である。埋土の状況から、一時的な滯水や、緩やかな水流があったことが窺え、大壁造り建物の囮み溝とは考えがたく、掘立柱建物を画する溝、あるいは排水機能の溝と考えられる。縄の羽口や鉄滓、固く焼き締まった粘土などが出土している。7世紀前半頃の遺構と考えられる。

**S D25** 2区及び12区検出の幅2.1m、深さ0.8m、溝の断面はU字あるいはV字形で、溝底は部分的に凹凸がある。埋土は、シルト混じりの砂が主体であり、溝底や側面に激しい水流によるものと思われる抉れがあり、集落内の雨水等の排水に機能した溝と考えられる。埋土からは、7世紀前半頃と考えられる須恵器环蓋や平瓶等が出土している。

- 水田** 2区と3区間に小さな谷地が存在し、1筆の幅約7m（東西幅）の水田を2筆検出した。植物珪酸体分析においてもイネ属の植物珪酸体が検出され、稻作が行なわれていたことが指摘されている。
- 出土遺物から、水田の時期は6世紀末葉から7世紀前半には造られ、7世紀前半から中頃には埋没したと考えられる。
- 第2遺構面** 2・3区で谷地（湿地）を検出したのみで、人為的な遺構は検出されなかった。谷地や遺物包含層からの土器の出土も少ないとなどからも、今回の調査地は、集落（居住域）の末端（南あるいは南西端）であったことが窺える。
- 弥生時代後期終末から古墳時代前期初頭の遺構は、4区で土坑や溝、7区の一部で落ち込みが出土したのみであり、以西では遺物包含層も遺存せず、遺物の出土もなかった。
- 谷地形** 護岸などの人為的な遺構は確認されなかった。3区中央と2区西端で緩やかな流水があったと思われる小流路が存在する。5世紀後半から6世紀初頭の須恵器や土師器の破片が少量出土している。
- 滑石製品** 谷地形が存在する2・3区を基準に全調査区内を2mの区画に区割りし、遺物包含層及び遺構面直上の土壤を採集し、後に洗浄し微細な遺物を選別採取した。その結果、この谷地形内から出土した滑石製模造品・玉類は、子持ち勾玉をはじめ、大小の勾玉、管玉、臼玉大小の双孔円盤、剣形など総数345点が出土した。特に2条検出された小流路内に集中しており、子持ち勾玉や双孔円盤、ガラス小玉などもこの埋土から出土している。
- 第9次調査においても多量の滑石製模造品・玉類が出土しており、今回の調査結果も含め、水辺での祭祀あるいは、集落内で行った祭祀での祭祀具を溝や小流路に投棄したものと考えられる。
- 3. まとめ** 今回の調査では、飛鳥時代及び奈良時代の遺構面と弥生時代後期終末及び古墳時代後期の遺構面を検出した。第9次調査の成果と合わせれば、飛鳥時代及び奈良時代の遺構面では、掘立柱建物が10棟検出されることになる。ただし、第9次調査検出の大壁造り建物については、今回検出のS-B03のような連続的な柱の抜き取りによって溝状の痕跡となった可能性が考えられ、再検討の必要性がある。
- 今回の調査で飛鳥時代（7世紀前半）の掘立柱建物が存在することが判明した。同時代の掘立柱建物は両調査区内で7棟検出され、棟方位も整ったかたちで検出されている。
- 第9次調査地及び今回調査地は、集落の南端に位置しているものと推定され、集落の中心は北側にあると思われるが、両調査の結果を見る限り、計画的な建物配置を行った可能性が考えれる。また、繩の羽口や鉄滓、銅滓、固く焼け締まった粘土塊など鍛冶遺構を窺わせる様な資料や、木蓋をした状態で出土した漆容器（土師器直口壺／2・3区検出水田埋没土内より出土）も注目される。
- 古墳時代後期の遺構面では、顕著な遺構は検出されなかったが、多くの滑石製模造品・玉類、ガラス玉が出土した。採取された状況から、小さな谷地形内を流れる小流路でこれらの遺物が集中している。この小流路の近くで何らかの祭祀が行われたものと考えられるが、第9次調査地の様に竪穴住居周辺においても多量の滑石製模造品・玉類が出土しており、今回の資料も含めて当時の集落内の祭祀のありかたを検討しなければならない。

## 第32次-2調査

1. 調査の概要 便宜上、対象範囲を4分割し、西側から順に1～4区と小地区名を付して順次調査を実施した。今回の調査地は、第16・19次調査地の南に隣接する。

今回の調査では4時期の遺構面を検出した。各遺構面の時代は、第1遺構面が鎌倉時代（13世紀前半）から平安時代後期（11世紀後半）、第2遺構面が飛鳥時代（7世紀）から平安時代前半（9世紀後半？）、第3遺構面が庄内式期（3世紀後半）、第4遺構面が弥生時代前期中葉である。

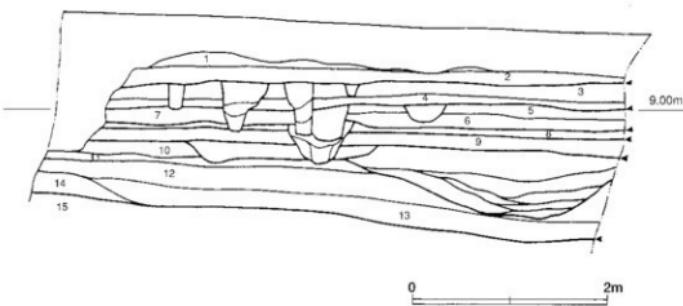
土層堆積状況の観察をもとに、調査地内における各時期の地形の概略を示すと、以下のようにになる。ただし東西に長いトレンチ調査であるため、東西方向についてのみ言及する。平安時代後期から鎌倉時代については、遺構面の遺存状況が悪く、詳細は不明である。

飛鳥時代から平安時代前期については、西にむかって高くなる地形である。本調査地の西側を南北に通る市道房王寺線に伴って実施した第1次調査では、この付近は縄文時代から平安時代にかけて存続した自然河川であったと考えられている。川の規模および流れる方向については、現在の房王寺線とほぼ同様と考えられている。このことからみて、今回の調査地は、当時は川の堆積作用によって形成された自然堤防あるいは、それに近似する地形であり、その最も高い地点から、徐々に東へ下がる状況を確認したものと考えられる。

弥生時代前期、庄内式期についても、基本的に上記の地形と同様であったと考えられるが、弥生時代前期には、東端でわずかに再び高くなっていく斜面の端緒を確認している。

検出した遺構は何れの時期のものも、最も標高の高い1～2区部分に集中しており、傾斜していく3区から東へいくほど遺構の分布密度は下がっていく。

以上から、今回の調査地は、上沢遺跡のうち、遺構が比較的集中する微高地部分に位置していると考えられる。



- 1 稲土 2 暗灰褐色砂質土（中世遺物包含層） 3 淡灰黄色砂質土（第1遺構面基盤層）
- 4 暗灰茶色砂質土（平安時代遺物包含層） 5 暗灰色砂質土（第2遺構面基盤層）
- 6 茶灰色粗砂疊 7 暗灰茶色砂質土（奈良時代遺物包含層） 8 淡茶灰色砂質土（第3遺構面基盤層）
- 9 暗茶褐色砂質土（第4遺構面基盤層、弥生時代～古墳時代遺物包含層）
- 10 黑褐色砂混じり砂質土（第5遺構面基盤層） 11 暗灰色砂混じり砂質土 12 暗灰黄色シルト
- 13 暗灰色粘性シルト 14 黑灰色砂質土 15 黑灰色粘性シルト（第6遺構面基盤層）

fig. 144  
調査区北壁断面図

第9次調査区 ✓ 第32次-1調査区

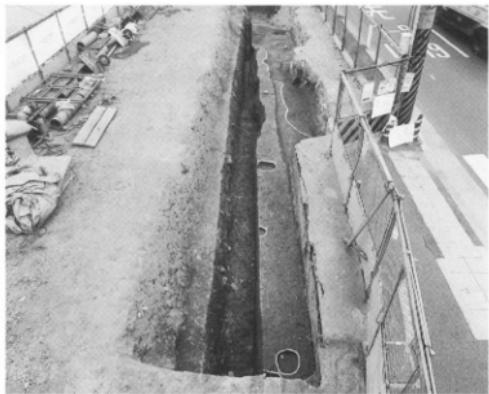
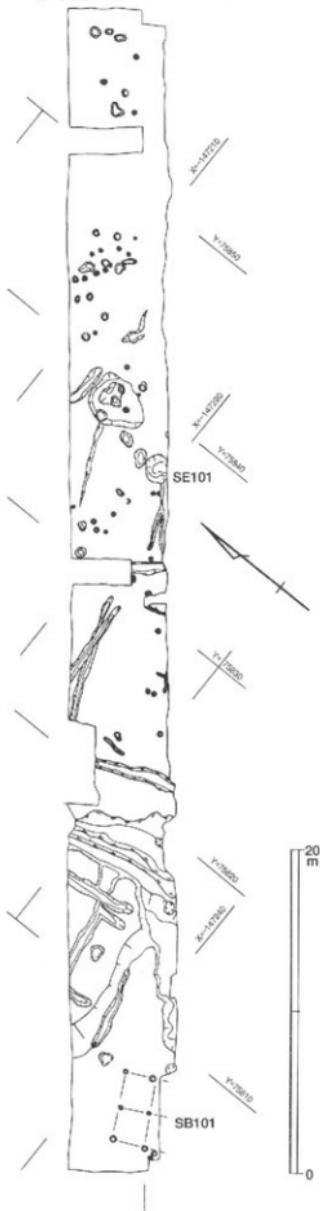


fig. 146 1区第1道横面全景

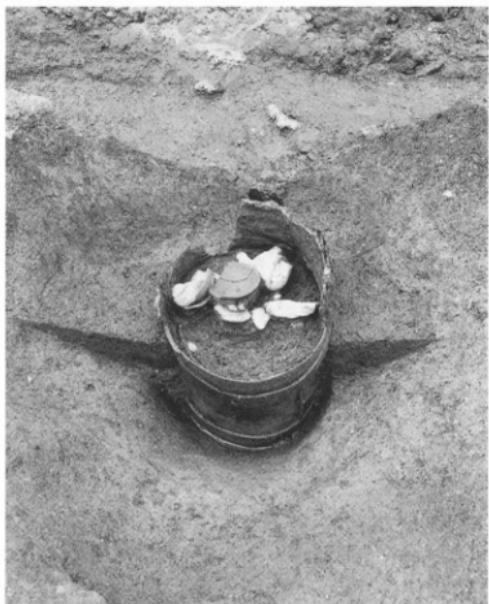


fig. 147 SE 101

fig. 145 第1道横面平面図

**第1遺構面** 平安時代後期から鎌倉時代の遺構面で、平安時代中期の洪水層を基盤層とする。今回の調査区では、1・2区に中世の遺構が集中している。

**S E 101** 2区で検出した、曲物を積み上げて井戸側（枠）とした円形の井戸である。掘形は東西1.8m、南北現存長1.3m、深さ0.85mの円形で、その中央に曲物の井戸側を据えている。井戸側の曲物は2段分を検出したが、土層断面の観察からもう1段分の曲物が存在していた痕跡を確認している。

2段検出された曲物は、厚さ1cm、幅30cmの薄板材を曲げ径35cm程度の筒をつくり、重ね合わせた端部を樹皮で留めている。上端と下端には、幅7cmの薄板材を巻き補強している。上段の曲物は上端を欠損している。

2段目の曲物の最下層には5～10cm程度の角礫があり、その上面に完形の須恵器椀1点と土師器小皿1点が正位置で出土した。出土状況から井戸の廃絶に伴って納められたものと考えられる。11世紀後半のものと考えられる。

**S E 101** の西側で掘立柱建物を2棟検出した。このうちS B 102はS E 101と同時期の建物と考えられる。

**S B 101** 1区西端で検出した総柱の掘立柱建物である。東西2間、南北1間分を検出したが、調査区外に延びており、建物の全体規模は明確ではない。南東隅の柱穴（S P 3）からは建物廃絶時に流入したと考えられる須恵器椀片が出土している。出土遺物から12世紀代の建物と考えられる。

**S B 102** 1区東端で検出した総柱の掘立柱建物である。東西2間、南北2間分を検出した。北、東、西側には延びる可能性はないが、南側については調査区に制限があり不明である。柱穴の底には板石が敷かれ柱の沈み込みを防いでいる。柱穴からは、11世紀後半から12世紀代に属する須恵器椀片が出土している。

**第2遺構面** 古墳時代から平安時代前半の遺構面である。溝5条、小穴8基を検出したが、掘立柱建物などの遺構を検出していない。今回の調査区以南が扇状地先端の集落の南端にある可能性も考えられる。

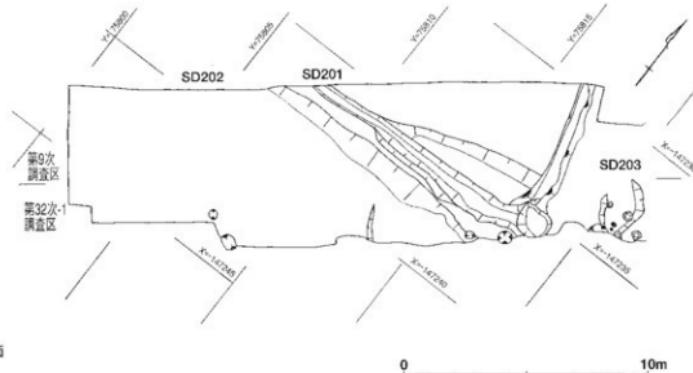


fig. 148  
1区第2遺構面  
平面図

**S D201** 幅1m、深さ約30cmの北西から南東に流れる溝である。溝底には、砂とシルトの堆積が認められ、一時的な滞水や緩やかな水流があったことが窺える。形状や堆積状況から建物や集落を画する区画溝の可能性もあるが、周辺の状況が未だ明らかではなく断定はできない。溝の底からは銅製の紋具が1点出土した。調査区の北側に位置する第4次調査地においても、銅製帶金具（巡方）が出土している。このほかに、土師器、黒色土器、須恵器等の破片が少量出土した。いずれも細片であるが、平安時代前半期のものと思われる。

**S D202** S D201の上面を浅く削平しており、砂とシルトの互層の状態で堆積している。その形状・堆積状況から造構面を覆う洪水面（第1造構面基盤層）の一単位である可能性が高い。

**ピット** ピットのうち7基は、1区中央やや東寄りで検出された。奈良時代から平安時代のものが大半であるが、掘立柱建物の柱穴の可能性は低い。2区で検出した1基については、古墳時代後期のものであるが、明確に当該時期といえる唯一の造構である。提瓶体部の大型の破片が出土しており、元来完形に近いものが納められていた可能性も考えられる。ただし、南側の大半が攪乱によって消失しており、その性格は不明である。

**第3造構面検出造構** 庄内式期の造構面である。掘立柱建物の柱穴、用途不明の溝やピットなどを検出した。

ピットのうち16基は、第16次調査結果と照合した結果、掘立柱建物の柱穴と考えられる。

**S B301** 調査区西端で、第16次調査区で検出した3間×4間の掘立柱建物の、南側部分である東西方向に並ぶ4基の柱穴を確認した。南北棟の建物であると考えられる。

**S B302** 調査区の中央、やや西よりで確認した。検出した範囲では3間×2間以上の掘立柱建物であるが、南側が調査区外に延びるため本来の規模は不明である。S B301と異なり、柱穴は大型の掘形をもたず、径18cm程度である。建物の軸はS B301とはほぼ同じである。



fig. 149 1 + 2 区 第3造構面平面図

溝状遺構は11条検出しているが、そのうち7条は第16次調査で検出したものと同一の遺構である。西側からS D301～311と呼称する。

S D301 調査区の西端で検出した。第16次調査結果と照合すると、L字状に曲がる長い溝である。屈曲しているが、基本的に北から南へ流れる溝である。最深部の深さは45cm程度である。

S D305 他の溝と異なり、東西方向に流れる。西端部は少し北に曲がり、幅も広がっているが、この幅広の部分の端を第16次調査でSK307（土坑）として検出している。今回の調査区内では東西に流れる溝状の形状を呈しているが、南側は調査区外に延びるため、全体の形状が不明のため、遺構の性格については、明確ではない。

庄内式期の土器が多量に出土している。何れも細片であるが、完形に復元可能なものばかりであり、意図的に投棄したものと考えられる。

S D306 今回の調査区内では幅60cmのL字状を呈するが、第16次調査結果を照合すると長さ7m以上の規模をもつ。南端は調査区外へ延びている。最深部の深さは30cm程度である。

S D308 第16次調査結果と照らし合わせると、幅55cm、深さ20cm程度の、円弧を描きながら東西方向に流れる溝である。東側が調査区外へ延びており、全長は不明である。

**出土遺物** 大量の土器が出土している S D305をはじめとして、庄内式の土器が出土していることから、大半は当該時期の遺構と考えられる。ただし切り合い関係の認められる遺構もあり、また一部弥生時代後期末の遺構も確認していることから、今後出土遺物の詳細な検討作業の進展に伴い、各遺構の細かな時期的変遷が判明する可能性が考えられる。

**第4遺構面** 弥生時代前期の遺構面で、溝4条、土坑3基、ピット8基を検出したほか、自然地形として、河の一部を検出した。



fig. 150  
1区第3遺構面全景



fig. 151 S D301



fig. 152 S D305

検出した遺構のうち、溝は調査地中央付近に集中しているが、北隣の第16調査結果と照合すると、2条については竪穴住居の周壁溝である可能性が高い。ピットについては、位置関係などから、住居の柱などの機能を果たすものではないと考えられる。

弥生時代前期の遺構については、その性格が明確なものはないが、土坑からは比較的多くの土器が出土している。ピット1基からも、壺の破片が比較的まとまって出土しており、意図的に投棄されたものと考えられる。遺物が多く出土する遺構は、調査区西半の標高の最も高い場所で集中して検出しており、2区東半以東では急激に遺構の密度が希薄となる。

遺構面の上層の遺物包含層からの遺物の出土も、1区の方が2区以東よりも顕著である。

以上から、弥生時代前期の居住域は、現在の市道房王寺線のすぐ西側付近の、自然堤防上の微高地を中心存在したと考えられる。

S D401 1区の東端で検出した、南北方向に流れる、幅約50cm、深さ20cmの溝である。埋土は単層で、わずかに土器が含まれていた。

S D402 S D401のやや東で検出した、幅約55cm、深さ10cmの南北に流れる溝である。埋土は単層で、遺物はほとんど出土していない。S D401とともに、竪穴住居の周壁溝である可能性が高い。

S K401 1区の中央付近で検出した。長径90cm、短径70cmの楕円形で、深さは5cm程度の浅いものである。埋土は単層で、土器の小片がわずかに出土した。

S K402 2区の西端で検出した。南側は調査区外まで延びるため、全体の形状や規模などは不明である。底部で遺存状況の良い弥生時代前期の土器がまとめて出土した。意図的に投棄されたものと考えられるが、詳細については不明である。検出した規模は、長辺1.9m、短辺0.6m、深さ約35cmで、長方形を呈する。

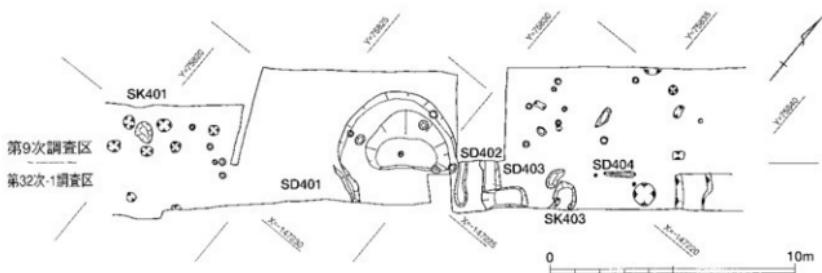


fig. 153 調査区中央部第4遺構面平面図

**S K403** S K402のすぐ東側で検出した土坑である。南側が一部調査区外に南に延びるため、正確な形状は不明だが、検出した規模は、長径1.1m以上、短径1.0mで、南北に長い楕円形である。深さは約10cmと浅い。底付近の埋土には、炭化物が多く混じる。出土遺物は S K402に比して少なく小片である。

**ピット** 18基を検出したが、散在しており、建物の柱穴などの機能をもつものではないと考えられる。それぞれの規模や、深さは異なるが、1区の中央付近で検出されたピットはいずれも深く、埋土の堆積も比較的複雑である。なかでも S P401は、埋土の最上層に、壺の下半分が破碎された形で入れられていた。

**河** 1区の西の端で、南方向に流下する河の一部を確認した。検出した規模は、幅約2.4m、深さ約60cmで、埋土内には最上層から底面まで、何れにも弥生時代前期の土器が含まれている。出土した土器は、全て同時期のもので、河が短時間に埋没したことを示すと考えられる。この河は、第1次調査で確認した河の支流と考えられる。

**出土遺物** 上記の遺構および遺構面の上層の遺物包含層からは、何れも弥生時代前期中頃のごく限られた時間幅の土器のみ出土している。壺・壺はヘラ描き沈線少条、あるいは削出突帯少条で飾られたもので、段を有するもの、ヘラ描き沈線多条、あるいは削出突帯多条、貼付突帯は、調査段階では検出していない。縄文時代晩期の突帯文土器も検出していない。

**小 結** 今回の調査では、大きく分けて4時期の居住域を確認した。  
最も古い時期のものは、縄文時代晩期から弥生時代前期前半頃と思われる。河を西の境として、それより東側に居住域を確認した。特に堅穴住居の可能性が高い落ち込みを検出しており、住居であれば、阪神間でも非常に珍しい縄文時代晩期から弥生時代前期前半(約2000年前頃)の住居の発見例となる。

また庄内式期(約1700年前)の遺構面では、多くの遺構を重複して検出した。第16次調査成果と合わせると、計7棟の掘立柱建物を確認しており、何れも真北よりやや南に振った方向で建てられている。溝も多く検出したが、性格については明確ではない。

以上の状況から、当該時期においては、調査区周辺は上沢遺跡の集落の中心部に位置していると考えられる。良好な状態で出土した土器も貴重な一括資料である。

平安時代前半から飛鳥時代の遺構は、当調査区以北で検出されているものに比べ少ないが、当該時期の集落の一端を明らかにできた。特に、SD201から出土した銅製帶金具



fig. 154 1区第4遺構面全景



fig. 155 2区第4遺構面全景

(絞具) や、第4次調査出土の銅製帶金具(巡方)、第33次調査出土の銅鏡などは、当地に公的施設(官衙:役所や寺院)が存在した可能性を十分に示すものである。

これに続く第1遺構面の平安時代後期から鎌倉時代においては、掘立柱建物や井戸が検出され、既往の調査の追加資料となつたが、短期間に建替えを行つた掘立柱建物や、多くの井戸が築れるなど、当時の人々の暮らしぶりが窺える資料となつた。



fig. 156 SK402

#### 4. 植生史関連調査

はじめに

上沢遺跡は、六甲山南麓を流下する河川により形成された複合扇状地上に位置する。発掘調査により、縄文時代晚期・弥生時代・古墳時代中期から後期・奈良時代・平安時代・鎌倉時代の集落址が検出されている。とくに、奈良時代・平安時代では、官衙の存在を示唆する遺物も出土している。

本遺跡では、これまでにも古植生復元や用材選択を知るために自然科学分析が実施されている（古環境研究所、1995；パリノ・サーヴェイ株式会社、1995；能城・鈴木、1995；未公表資料）。その結果では、自然木でヤマグワ、アカガシ属、コナラ節などが確認されている。また、植物珪酸体分析から、稻作の可能性が示唆されている。しかし、花粉化石はほとんど産出せず、古植生や生業の詳細は不明である。また、奈良時代～中世にかけての木製品などには、ヒノキなどの針葉樹が多く見られた。

本報告では、第32次-1調査で検出された飛鳥時代の水田等の土壤試料について、花粉分析と植物珪酸体分析を行い、古植生や稻作について検討する。また、第9・20・32-2調査で出土した木製品の樹種同定を行い、用材選択に関する資料を得る。

#### I. 古植生および稻作の検討

##### 1. 試料

試料は、第32次-1調査で検出された水田や遺物包含層から採取された土壤試料10点(S-001~010)である。各試料の詳細は、表に示した。

花粉分析・植物珪酸体分析試料

番号	採取地区	採取遺構	時期
S-001	4区	遺物包含層・遺構面	飛鳥時代
S-002	4区	遺物包含層・遺構面	古墳時代後期
S-003	7区	遺物包含層・遺構面	古墳時代後期
S-004	8区	遺物包含層・遺構面	飛鳥時代後期
S-005	8区	遺物包含層・遺構面	古墳時代後期
S-006	10区	水田～湿地	飛鳥～古墳時代
S-007	10区	水田小畦畔	飛鳥時代
S-008	10区	水田圃場面	飛鳥時代
S-009	10区	水田大畦畔	飛鳥時代
S-010	14区	SD101埋土	飛鳥時代

#### 2. 方法

##### (1) 花粉分析

試料約10 gについて、水酸化カリウムによる泥化、篩別、重液（臭化亜鉛：比重2.2）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリンス処理の順に物理・化学的処理を施し、花粉化石を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作製し、光学顕微鏡下でプレパラート全面を操作し、出現する全ての種類について同定・計数する。

結果は、木本花粉は木本花粉総数、草本花粉・シダ類胞子は総花粉・胞子数から不明花粉を除いたものを基数とした百分率で出現率を算出し図示する。図表中で複数の種類をハッシュタグで結んだものは、種類間の区別が困難なものである。

## (2) 植物珪酸体分析

湿重5 g 前後の試料について過酸化水素水・塩酸処理、超音波処理(70W, 250kHz, 1分間)、沈定法、重液分離法(ポリタングステン酸ナトリウム、比重2.5)の順に物理・化学処理を行い、植物珪酸体を分離・濃集する。これを検鏡し易い濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

### 花粉分析結果

種類	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
木本花粉											
セイヨウ属		5	-	3	-	1	39	39	32	23	46
ツガ属		-	2	-	-	1	21	8	-	19	18
トウヒ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
マツ属		12	5	2	1	1	95	57	99	49	115
コウヤマキ属		2	-	-	-	-	-	3	5	4	-
スピノ属		-	-	-	-	-	26	29	28	8	14
イチイ科イヌガヤ科ヒノキ科		-	-	-	-	-	1	-	4	-	1
ヤマモミ属		-	-	-	-	-	4	2	-	1	-
クルミ属		-	-	-	-	-	-	-	3	-	-
サワグルミ属一クルミ属		-	-	-	-	-	-	3	-	-	-
クマシゲ属一アザミ属		-	-	-	-	-	4	-	-	-	1
カバノキ属		-	-	-	-	-	2	-	3	-	-
ハンノキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ブナ属		-	-	-	-	-	2	4	1	-	2
コナラ属コナラ亜属		-	-	-	-	-	6	2	8	2	6
コナラ属アガシガシ属		2	-	-	-	-	13	8	15	5	5
クリ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
シノノキ属		-	-	-	-	-	2	-	4	-	-
ニレ属一ケヤキ属		-	-	-	-	-	3	-	8	-	-
モチノキ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ブドウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
ノブドウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
スイカズラ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
草本花粉											
サジオモダカ属		-	-	-	-	-	-	1	-	-	-
イネ科		-	-	-	-	-	315	121	188	55	124
カヤツリグサ科		-	-	-	-	-	14	3	10	7	10
ギンギギン属		-	-	-	-	-	5	-	1	-	-
ササエタデ節一ウナギツカミ節		-	-	-	-	-	2	1	-	4	5
アカザ科		-	-	-	-	-	25	8	-	5	-
ナデシコ科		-	-	-	-	-	10	1	7	2	6
キンボウゲ属		-	-	-	-	-	-	-	2	-	-
キンボウゲ科		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
アブラナ科		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
フウロソウ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
アカバナ属		-	-	-	-	-	-	-	-	-	1
セリ科		-	-	-	-	-	-	-	-	-	2
オオバコ属		-	-	-	-	-	1	-	-	-	-
ツリガネニンジン属一ホタルブクロ属		-	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ヨモギ属		-	-	-	-	-	48	15	16	17	25
オナモミ属		-	-	-	-	-	1	-	-	1	-
キク亜科		1	-	-	-	-	-	-	1	-	-
ベニバナ属		-	-	-	-	-	-	-	1	1	-
タンボボア科		-	-	-	-	-	-	-	-	1	-
不明花粉		-	-	-	-	-	2	2	3	3	1
シダ類胞子		110	10	21	1	4	91	57	81	68	31
シダ類孢子		110	10	21	1	4	91	57	81	68	31
合計		21	7	5	1	3	219	156	212	111	211
木本花粉		1	0	0	0	0	423	150	227	93	174
草本花粉		0	0	0	0	0	2	2	3	3	1
不明花粉		110	10	21	1	4	91	57	81	68	31
シダ類胞子		132	17	26	2	7	733	363	520	272	416
總計(不明を除く)											

結果は、検出された種類とその個数の一覧表で示す。また、検出された植物珪酸体の出現傾向から古植生や稻作について検討するため、植物珪酸体群集図を作成した。各種類の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。

### 3. 結果

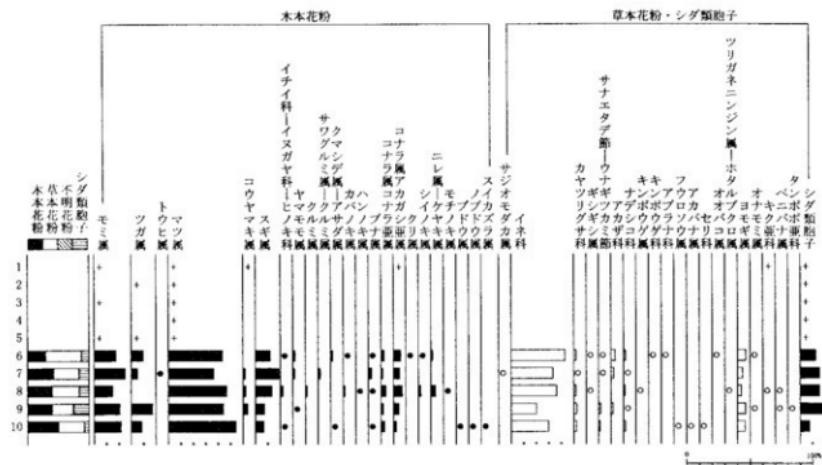
(1) 花粉分析 結果を表、fig.157に示す。遺物包含層(S-001~005)ではほとんど検出されない。水田層とSD101(S-006~010)では花粉化石が検出されるが、保存状態はあまりよくない。これら5つの試料の花粉化石群集は、類似する。木本花粉では、マツ属の割合が高く、モミ属、ツガ属、スギ属などの針葉樹花粉やコナラ亜属、アカガシ亜属などの広葉樹花粉などを伴っている。草本花粉では、イネ科の割合が高く、ヨモギ属やカヤツリグサ科などの草本類を伴っている。

#### (2) 植物珪酸体分析

結果を表、fig.158に示す。各試料からは植物珪酸体が検出されるものの、保存状態は悪く、表面に多数の小孔(溶食痕)が認められる。

以下に、調査区毎に結果を述べる。

<4区> 試料番号1(6層)と試料番号2(8層)の産状は、ほぼ同様である。すなわち、タケ亜科の産出が目立ち、ヨシ属やウシクサ族、イチゴツナギ亜科が見られる。また、ともに栽培植物のイネ属も検出される。



出現率は、木本花粉は木本花粉化石総数、草本花粉・シダ類胞子は総数より不明花粉を除く数を基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満、+は木本花粉100個体未満の試料について検出した種類を示す。

fig. 157 花粉化石群集の層位分布

- <8区> 試料番号3(4層)と試料番号4(8層)の産状は、ほぼ同様である。すなわち、タケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科が見られる。
- <10区> 試料番号5(11層)と試料番号6(14層)の産状は、ほぼ同様である。すなわち、タケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科が見られる。
- 飛鳥時代の鞋畔や圃場面の試料番号7・8・9(10層)でも同様な産状であるが、イネ属は試料番号8(圃場面)でわずかに認められたに過ぎない。
- <14区> SD101埋土である試料番号10(14層)ではタケ亜科の産出が目立ち、イネ属、ヨシ属、ウシクサ族、イチゴツナギ亜科が見られる。

#### 植物珪酸体分析結果

種類	試料番号	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属	15	1	3	1	3	2	-	1	-	2	
タケ亜科	122	196	137	180	150	210	200	168	177	147	
ヨシ属	5	6	7	4	4	-	1	2	2	6	
ウシクサ族コブナギサ属	4	3	3	2	4	-	-	3	-	4	
ウシクサ族ススキ属	4	9	4	1	5	4	-	2	5	2	
イチゴツナギ亜科	22	14	17	9	14	9	7	7	4	15	
不明 A型	22	28	20	21	14	14	11	6	11	28	
不明 B型	5	14	7	11	11	16	10	6	6	10	
不明 D型チク草	16	26	26	28	7	21	22	24	16	23	
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属	14	2	2	2	3	3	-	2	-	4	
タケ亜科	87	94	134	104	99	148	116	98	106	252	
ヨシ属	2	-	1	-	3	1	-	-	-	2	
ウシクサ族	14	5	10	8	11	8	6	7	4	8	
不明	18	11	17	13	3	14	6	7	8	12	
合計		215	297	224	257	212	276	251	219	221	237
イネ科葉部短細胞珪酸体		135	112	164	127	118	174	128	114	118	128
イネ科葉身機動細胞珪酸体		350	409	388	384	331	450	379	333	339	515
粗 織 片		-	-	-	-	-	-	1	-	-	1
イネ属短細胞列		-	-	-	-	-	-	-	-	-	

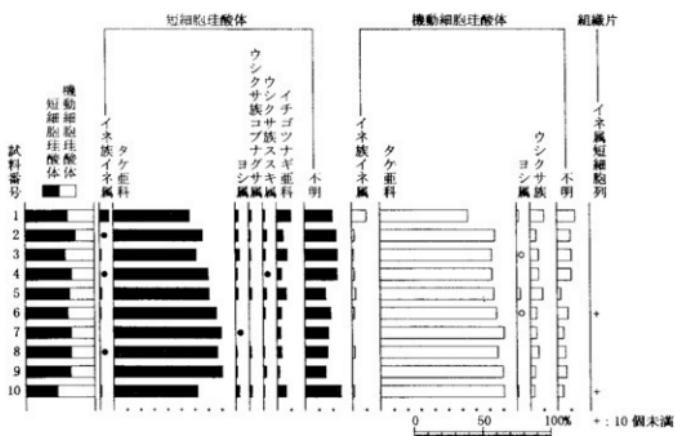


fig. 158

植物珪酸体群集の層位分布と組織片の産状

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数を基準として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類を示す。また、組織片の産状を検出個数により+の記号で示す。

#### 4. 考察

##### (1) 花粉化石からみた古植生

本遺跡では、これまでにも縄文時代末～弥生時代にかけての花粉分析を行っているが、花粉化石の保存が悪くほとんど検出されていない（パリノ・サーヴェイ株式会社：1995）。今回の成果をみても、遺物包含層に関しては化石の保存が悪い。花粉化石は、好気的環境下での風化に弱いことから、このような環境下において、分解・消失した可能性がある。このことから、遺物包含層は、堆積当時あるいは堆積後に好気的環境下におかれたことが考えられる。

水田層とSD101では、花粉化石が検出される。木本類は針葉樹が主体で、その中でもマツ属の割合が高い。また草本類の割合が高く、その中でもイネ科が顕著である。近畿地方の植生変遷をまとめた前田（1984）の結果に対比すると、今回分析を行った飛鳥時代は、照葉樹林Ⅱ期の後半に相当する。この時期の特徴として、マツ属の増加、草本花粉の増加、栽培植物の出現があげられる。また、それ以前から引き続いてモミ属、ツガ属、スギ属など温帯針葉樹の増加がみられる。今回の結果をみても、この傾向は顕著に現れている。また、植物珪酸体分析でもイネ属が認められる。

栽培植物（イネ属・ベニバナ属）の検出は、周辺での栽培といった生業の拡大に起因すると思われる。また、水田耕作などに伴う開発なども行われ、周辺の山野が切り開かれていたと考えられる。草本類は、このような開発でできた開けた空間に、先駆的に進入して生育し、分布を拡大していったと考えられる。今回花粉化石でみられた中でも、特にイネ科、カヤツリグサ科、アカザ科、ギシギシ属、オオバコ属、ヨモギ属は開けた草地に多く生育する種類であることから、これらが、水田の周辺に多くみられたと考えられる。

一方、マツ属の増加は、人間の生業に伴う植生干渉の結果、マツの二次林や植林が増えた結果であると考えられている。このような植生変化は、弥生時代～古墳時代頃から各地で起こったことが、これまでの発掘成果から明らかになっている（辻，1993）。また、モミ属やツガ属などの温帯針葉樹林の増加は、気候の冷涼化が原因と考えられ、縄文時代後・晩期から増加が始まっている（前田，1984；那須，1989）。このような傾向は、大阪平野に立地する遺跡の花粉分析結果をみても、堺市的小坂遺跡（パリノ・サーヴェイ株式会社：1992、鈴木：1992、安田：1992）や、東大阪市の宮ノ下遺跡（辻ほか，1996）や鬼虎川遺跡（金原正明・金原正子，1997）などで同様な傾向がみられる。おそらく、これらの温帯針葉樹は、主に、段丘～山地を中心に分布していたものと考えられる。

##### (2) 植物珪酸体分析からみた稲作について

飛鳥時代から古墳時代の遺物包含層および水田では、タケアキ科をはじめとして、ヨシ属やウシクサ族、イチゴツナギ亞科などのイネ科植物が確認され、これらのイネ科植物が周囲に生育していたことが推定される。また、各地区からイネ属の植物珪酸体が認められ、少なくとも飛鳥時代以降稲作が行われていたことが指摘できる。これは、飛鳥時代の水田が検出されていることとも調和的である。しかし、全体的にイネ属の出現率は低い。

地点別に見ると、イネ属は試料番号S-001（遺物包含層・遺構面）で最も多く産出しているが、水田～湿地、水田圃場面では少なく、水田小畦畔と水田大畦畔では全く認められ

なかった。これらの土壤試料の花粉分析では、イネ属花粉が多数認められている。また、稻藁は、燃料材、屋根材など様々な用途に有用である。これらのこと考慮すれば、イネ属は株刈り等により、植物体ごと収穫され、胚乳は食糧に、藁は様々な用途に利用され、その結果としてイネ属の出現率が低いことが推定される。

## II. 木製品の樹種

1. 試料 試料は、第9・20次・32次-2次調査で出土した木製品31点である。このうち、第9次調査のR405は炭化材であった。各試料の詳細は、樹種同定結果と共に表に記した。
2. 方法 剥刀の刃を用いて木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール（抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。作製したプレパラートは、生物顕微鏡で観察・同定する。  
炭化材は、3断面の割断面を製作し、実体顕微鏡および走査型電子顕微鏡で木材組織を観察し、その特徴から種類を同定する。
3. 結果 樹種同定結果を表に示す。試料は針葉樹6種類（マツ属複維管束亞属・ツガ属・スギ・コウヤマキ・ヒノキ・カヤ）と広葉樹1種類（トチノキ）に同定された。各種類の主な解剖学的特徴を以下に記す。
  - ・マツ属複維管束亞属 (*Pinus* subgen. *Diploxylon*) マツ科  
仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い。垂直樹脂道および水平樹脂道が認められる。分野壁孔は窓状となり、放射仮道管内壁には顕著な鋸歯状の突出が認められる。放射組織は単列、1~15細胞高。
  - ・ツガ属 (*Tsuga*) ツガ科  
仮道管の早材部から晩材部への移行は急で、晩材部の幅は広い。樹脂細胞が認められる。傷害樹脂道が認められる試料がある。放射組織は仮道管と柔細胞で構成され、柔細胞壁は滑らかで数珠状末端壁が認められる。分野壁孔はヒノキ型で、1分野に1~4個。放射組織は単列、1~20細胞高。
  - ・スギ (*Cryptomeria japonica* (L. f.) D. Don) スギ科スギ属  
仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞がほぼ晩材部に限って認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔はスギ型で、1分野に2~4個。放射組織は単列、1~15細胞高。
  - ・コウヤマキ (*Sciadopitys verticillata* (Thunb.) Sieb. et Zucc.) コウヤマキ科コウヤマキ属  
仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やかで、晩材部の幅は広い試料と狭い試料とがある。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞の壁は滑らか。分野壁孔は窓状となる。放射組織は単列、1~5(10)細胞高。

## 上沢遺跡の樹種同定結果

調査次	試料番号	番号	出土地区	遺物名	層位	時期	樹種
第9次	R 401	2-5-A	板材	S D01上層	8世紀後半～9世紀前半	コウヤマキ	
	R 402	2-1-B	木片	S P07	7世紀前半～中葉	コウヤマキ	
	R 403	2-1-B	木片	S P11	7世紀前半～中葉	コウヤマキ	
	R 404	1-1-A	柱痕（大型建物）	S B04-3	7世紀初頭～前半	コウヤマキ	
	R 405	5-2-A	炭化材	S X17	5世紀末葉～6世紀初頭	マツ属複雜管束亞屬	
第20次	1	W-001	4区	井戸枠材（横材）	S E01	13世紀前半	ツガ属
	2	W-002	4区	井戸枠材（横枝材）	S E01	13世紀前半	ツガ属
	3	W-003	4区	井戸枠材（横枝材）	S E01	13世紀前半	コウヤマキ
	4	W-004	4区	墨書き木札	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	5	W-006	4区	木挽き椀	S E01	13世紀前半	トチノキ
	6	W-007	4区	木製品	S E01	13世紀前半	マツ属複雜管束亞屬
	7	W-008	4区	下駄	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	8	W-009	4区	曲物（本体）	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	9	W-009	4区	曲物（補強帶材上）	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	10	W-009	4区	曲物（補強帶材下）	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	11	W-009	4区	曲物（底板）	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	12	W-009	4区	曲物（目釘）	S E01	13世紀前半	カヤ
	13	W-014	4区	井戸枠材（添版材）	S E01	13世紀前半	マツ属複雜管束亞屬
	14	W-015	4区	井戸枠材（横材-1）	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	15	W-016	4区	井戸枠材（横材-2）	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	16	W-020	4区	井戸枠材（横材-3）	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	17	W-022	4区	井戸枠材（横材-4）	S E01	13世紀前半	スギ
	18	W-023	4区	井戸枠材（曲物）	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	19	W-024	4区	井戸枠材（曲物）	S E01	13世紀前半	ヒノキ
	20	W-026	1区	井戸枠材（曲物）	S E2001	9世紀後半	ヒノキ
第32次-2	21	W-001	2区	曲物（本体）	S E01	11世紀後半	ヒノキ
	22	W-001	2区	曲物（補強帶材下）	S E01	11世紀後半	ヒノキ
	23	W-002	2区	曲物（本体）	S E01	11世紀後半	ヒノキ
	24	W-002	2区	曲物（補強帶材上）	S E01	11世紀後半	ヒノキ
	26	W-002	2区	曲物（補強帶材下）	S E01	11世紀後半	ヒノキ
	27			柱材		12世紀前半	コウヤマキ

・ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* (Sieb. et Zucc.) Endlicher) ヒノキ科ヒノキ属

仮道管の早材部から晩材部への移行は緩やか～やや急で、晩材部の幅は狭い。樹脂細胞が晩材部付近に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はヒノキ型～トウヒ型で、1分野に1～3個。放射組織は単列、1～15細胞高。

・カヤ (*Torreya nucifera* Sieb. et Zucc.) イチイ科カヤ属

仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は狭い。放射組織は柔細胞のみで構成され、柔細胞壁は滑らか。分野壁孔はトウヒ型～ヒノキ型で、1分野に1～4個。放射組織は単列、1～10細胞高。仮道管内壁には対をなしたらせん肥厚が認められる。

・トチノキ (*Aesculus turbinata* Blume) トチノキ科トチノキ属

散孔材で管壁は厚く、横断面では角張った楕円形、単独または2～3個が複合して散在し、年輪界に向かって径を漸減する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は同性、単列、1～15細胞高で階層状に配列する。

## 4. 考察

出土した木製品は、井戸の枠材および曲物、柱材、木札、木挽き椀、下駄などである。

このうち、木挽き椀にトチノキが認められた以外は全て針葉樹材で、とくにヒノキの利用が多い。針葉樹材の多い結果は、前回の結果とも一致しており、針葉樹材を中心とした用材選択が行われていたことが推定される。

時期別に見ると、第9次調査区の7世紀初頭から9世紀前半までの板材、木片、柱痕は全てコウヤマキであった。一方、第20次調査区と第35次調査区から出土した、11世紀後半から13世紀前半の井戸枠を中心とした用途には、ヒノキが多く見られ、コウヤマキは井戸枠と柱材に2点認められたのみであった。この結果から、コウヤマキは、7世紀初頭から9世紀前半以降に使用量が減少している可能性がある。しかし、前回の調査では12世紀代の試料についてもコウヤマキが出土しており、現時点では詳細は不明である。

第20次調査のS E01と、第32次-2調査S E01では、井戸の枠や曲物等について部位別に樹種同定を行った。その結果を見ると、基本的にはヒノキが多く利用されている。同様の結果は、第33次で行った調査でも確認されている（本書参照）。ヒノキが多く利用されている背景には、加工が容易であること、防虫性、耐水・耐湿性に優れていること等の材質を考慮した用材選択が推定される。しかし、第16次の井戸枠ではツガ属が多く認められていることから、必ずしもヒノキが選択されていたとはいえない。用材が異なる背景は、井戸の使用者や井戸の設置目的等が関わっている可能性がある。

第20次調査S E01の井戸材を見ると、上部から出土した井戸枠材（試料番号1～3）はツガ属とコウヤマキで、ヒノキは1点も見られない。この結果から、部位によって用材が異なっていた可能性がある。また、下部の樹状に組まれた井戸枠4点のうち、1点はスギであった。後世の修理などにより用材が異なっている可能性があるが、断定には至らない。

第20次調査S E01から出土した曲物は、目釘を除く部材は全てヒノキであった。これは、曲物の民俗事例（成田、1996）とも一致しており、加工性、防虫性、耐水・耐湿性等を考慮した用材選択が推定される。一方、目釘はカヤであった。カヤは、ヒノキに比較すると重硬で、やや加工が困難である。そのため、曲物の側板などには適材とはいえないが、逆に接合部の素材としては強度が高く適材といえる。今回の結果から、それぞれの部位に必要な材質を考慮した用材選択が行われていたことが指摘できる。

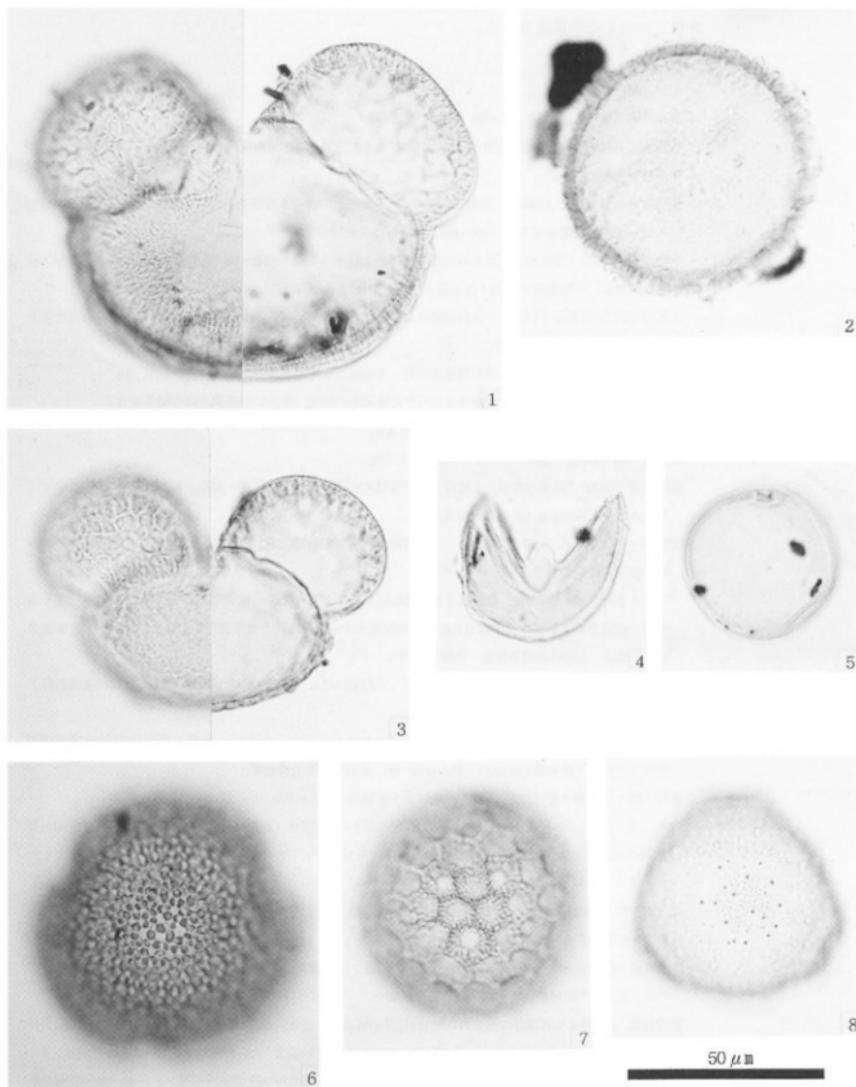
木挽き椀は、落葉広葉樹のトチノキであった。トチノキは、漆器碗の木地として一般的な種類であり、これまでにも多くの遺跡で出土例が報告されている（島地・伊東、1988；伊東、1990）。また、これらの結果は、挽物の使用樹種に関する民俗事例（橋本、1979）とも一致している。トチノキは、ブナ属と共に、乾燥が難しく狂いが出やすいが、簡単に入手するために使用量が多い木材に分類される。また、トチノキは心材の赤味が割れ狂いが多いため、椀にはシラタと呼ばれる辺材部分を使用する。辺材部分は多くとれても四寸（約12cm）程度であるため、木取りは横木地の板目取りが適するとされる（北野、1999）。今回の試料についても、同様の木取りが行われている可能性がある。

下駄は、ヒノキであった。中世の下駄については、広島県福山市草戸千軒町遺跡で多くの試料について樹種同定が行われている（山内、1976；パリノ・サーヴェイ株式会社、1997）。その結果では、ヒノキが多くを占めており、今回の結果とも一致する。草戸千軒町遺跡の調査では、ヒノキの他にもコウヤマキ、ツガ属、クリ等が確認されており、遺跡周辺で入手可能な木材が利用されたことが指摘されている。本遺跡でも、ヒノキは井戸枠など大型の部材に多数認められ、ヒノキの木材が入手可能な状況であったことが推定される。草戸千軒町遺跡の結果を考慮すれば、ヒノキの他にもコウヤマキやツガ属なども利用

されていたことが推定される。

#### 引用文献

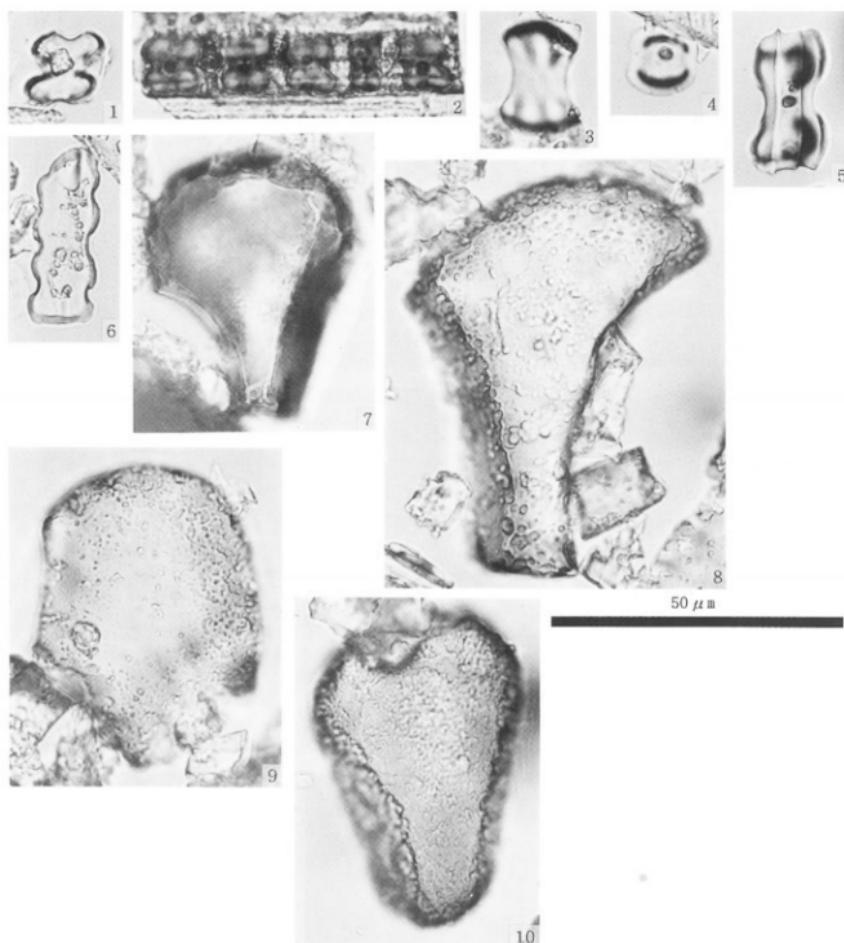
- 橋本鉄男 (1979)『ろくろ』p.444, 法政大学出版局。
- 伊東隆夫 (1990)『日本の遺跡から出土した木材とその樹種Ⅱ』木材研究・資料, 26, p.91-189, 京都大学木材研究所。
- 金原正明・金原正子 (1997)「鬼虎川遺跡第35-1次調査における古植生および古環境の検討」『鬼虎川遺跡第35-1次発掘調査報告』p.104-119, 東大阪市文化財協会。
- 北野信彦 (1999)『生産技術面からみた江戸遺跡出土漆器の生産・流通・消費』『江戸遺跡研究会第12回大会江戸の物流 一陶磁器・漆器・瓦から』〔発表要旨〕p.5-24。
- 古環境研究所 (1995)『神戸市 上沢遺跡におけるプラント・オバール分析』『上沢遺跡 発掘調査報告書』p.62-68, 神戸市教育委員会。
- 近藤鍊三・佐瀬 隆 (1986)「植物珪酸体分析、その特性と応用」第四紀研究, 25, p.31-64。
- 前田安夫 (1984)『花粉分析学的研究よりみた近畿地方の洪積(更新)世後期以降の植生変遷』宮脇 昭編『日本植生誌 近畿』p.87-99, 岩波社。
- 成田壽一郎 (1996)『作物・植物』p.205, 理工学社。
- 那須孝悌 (1989)「活動の舞台」: 概論、永井昌文・那須孝悌・金闇 怒・佐原 真編『弥生時代の研究1 弥生人とその環境』p.119-130, 雄山閣。
- 能城修一・鈴木三男 (1995)『神戸市 上沢遺跡出土木材の樹種同定』『上沢遺跡 発掘調査報告書』p.69-76, 神戸市教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1992)「小坂遺跡における珪藻・花粉・植物珪酸体からみた古環境」『小坂遺跡-近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書-自然科学・考察編』p.561-582, 大阪府教育委員会・大阪文化財センター。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1995)『神戸市 上沢遺跡における花粉分析』『上沢遺跡 発掘調査報告書』p.77-82, 神戸市教育委員会。
- パリノ・サーヴェイ株式会社 (1997)『草戸千軒町遺跡から出土した下駄の樹種』草戸千軒町遺跡調査研究報告1『草戸千軒町遺跡出土の下駄』p.70-86, 広島県立歴史博物館。
- 島地 謙・伊東隆夫編 (1988)『日本の遺跡出土木製品総覧』p.296, 雄山閣。
- 鈴木 茂 (1992)『小坂遺跡15Fトレンチの花粉化石』『小坂遺跡-近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書-自然科学・考察編』p.525-533, 大阪府教育委員会・大阪文化財センター。
- 辻 誠一郎 (1993)『植物と気候』石野博信・岩崎卓也・河上邦彦・白石太一郎編『古墳時代の研究1 総論・研究史』p.105-112, 雄山閣。
- 辻本裕也・伊藤良永・馬場健司 (1996)『古環境』『宮ノ下遺跡第1次発掘調査報告書 - 第2分冊 - 』p.27-55, 東大阪市文化財協会・東大阪市文化財協会。
- 安田喜憲 (1992)『小坂遺跡の泥土の花粉分析』『小坂遺跡-近畿自動車道松原海南線および府道松原泉大津線建設に伴う発掘調査報告書- 自然科学・考察編』p.519-522, 大阪府教育委員会・大阪文化財センター。
- 山内 文 (1976)『植物性出土品、木材』『草戸千軒町遺跡-第11~14次発掘調査概-』p.47-49, 広島県教育委員会。



1.モミ属 (S-010)  
3.マツ属 (S-010)  
5.イネ科 (S-010)  
7.サンエタデ節—ウナギツカミ節 (S-010)

2.ツガ属 (S-010)  
4.スギ属 (S-010)  
6.フクロウソウ属 (S-010)  
8.スイカズラ属 (S-010)

fig. 159 上沢道跡第32次－1 調査産出花粉化石



- 1. イネ属短細胞珪酸体 (S-001)
- 2. イネ属短細胞列 (S-006)
- 3. タケ亜科短細胞珪酸体 (S-009)
- 4. ヨシ属短細胞珪酸体 (S-003)
- 5. コブナグサ属短細胞珪酸体 (S-005)
- 6. イチゴツナギ亜科短細胞珪酸体 (S-001)
- 7. イネ属機動細胞珪酸体 (S-001)
- 8. タケ亜科機動細胞珪酸体 (S-007)
- 9. ヨシ属機動細胞珪酸体 (S-006)
- 10. ウシクサ属機動細胞珪酸体 (S-003)

fig. 160 上沢遺跡第32次-1 調査産出植物珪酸体



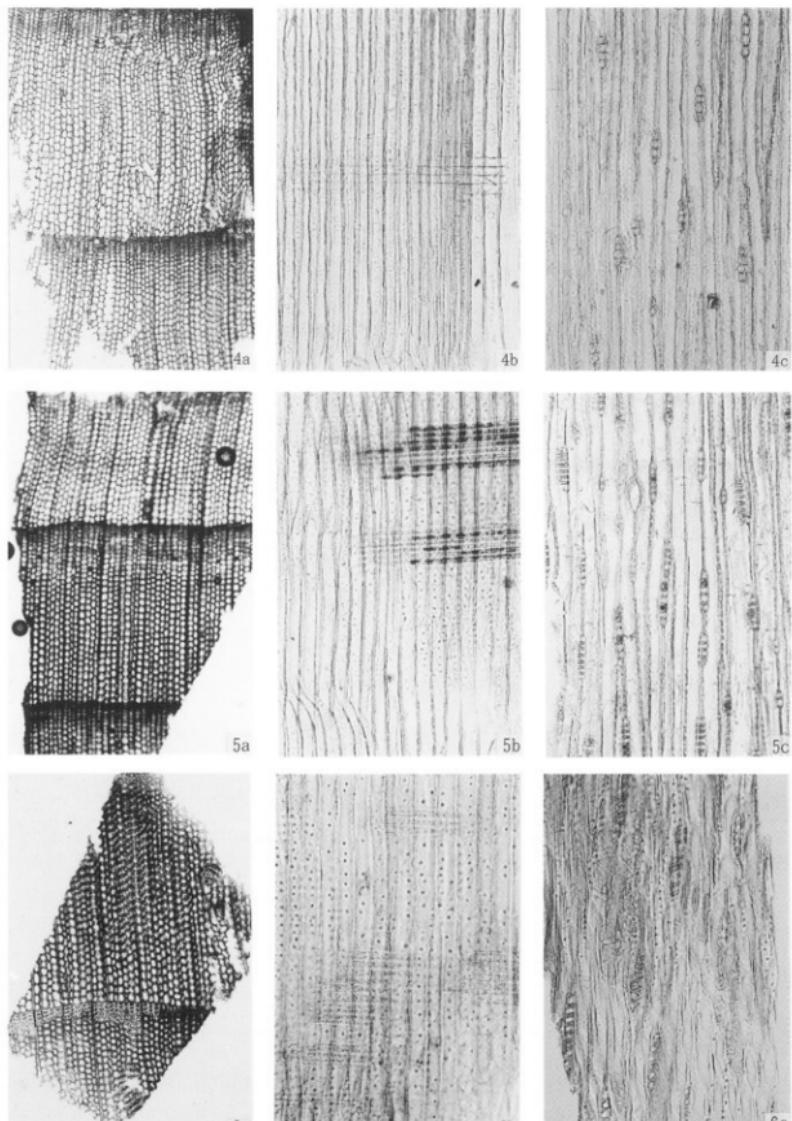
1.マツ属後椎管束亞属 (試料番号13)

2.ツガ属 (試料番号2)

3.スギ (試料番号17)

a : 木口, b : 横目, c : 板目

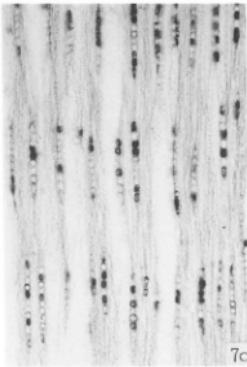
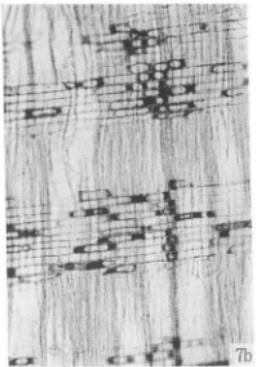
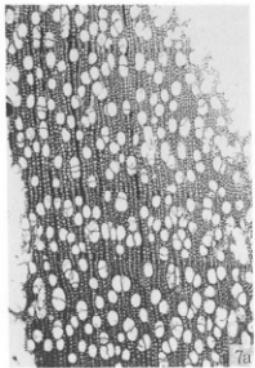
fig. 161 上沢遺跡第20次調査出土木材樹種



4.コウヤマキ (R401)  
5.ヒノキ (試料番号26)  
6.カヤ (試料番号12)  
a:木口, b:径目, c:板目

fig. 162 上沢遺跡第9・20・32次－2調査出土木材樹種

200 μm : a  
200 μm : b, c



7.トチノキ (試料番号5)  
a:木口。b:年輪。c:板目

200  $\mu$  m : a,  
200  $\mu$  m : b, c

fig. 163 上沢遺跡第20次調査出土木材樹種

20. 上沢 遺跡 第34次・36次—I・II調査

1. はじめに

今から約50～60万年前に始まった「六甲変動」によって六甲山系が隆起し、六甲花崗岩の被覆層であった大阪層群が南方に流失していったが、上沢遺跡は流出し残った大阪層群で形成される会下山丘陵から派生する微高地に立地する。遺跡は昭和63年度に実施した試掘調査で発見され、同年度から平成元年度に第1次調査を実施した。その後暫く調査の機会はなかったが、平成7年の阪神・淡路大震災以降、土地区画整理や個人住宅の建築、山手幹線拡幅に伴って急激に調査事例が増加している。

これまでの調査によって、弥生時代前期、弥生時代後期から古墳時代初頭、奈良時代から平安時代、中世の遺構面を確認し、今まで実態が不明であったが各時期の拠点集落で構成される大規模複合遺跡であることが判明した。

上沢通7・8丁目において、分譲住宅あるいは店舗兼個人住宅が建設されるのに伴って、3回の発掘調査を実施した。

以下、その概要である。

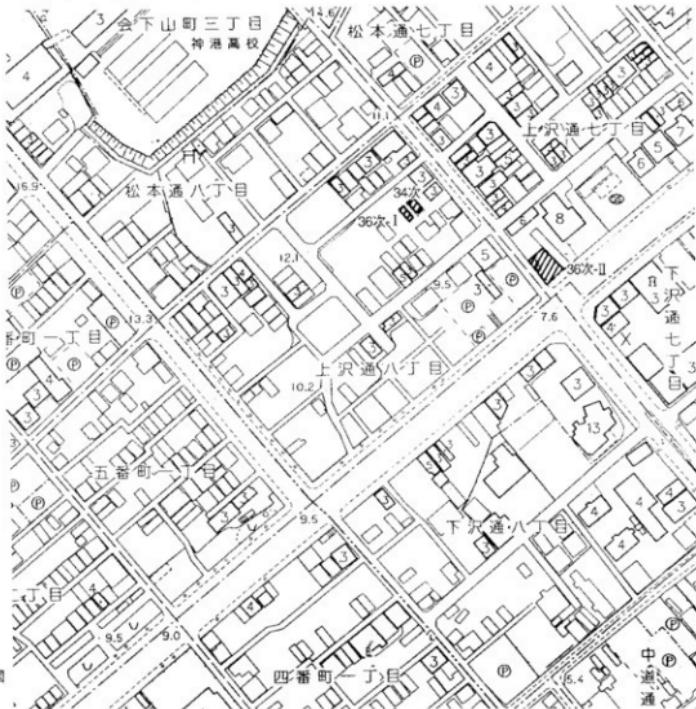


fig. 164  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 第34次調査

### 1. 調査の概要

#### 基本層序

上層から順に、近現代の造成土・旧耕土の淡褐灰色砂混じりシルト、遺物包含層が3層（灰色粘質土・暗灰色シルト・暗茶灰色粘質土）、無遺物層が2層（暗黄褐色土・淡灰黄褐色微砂）と続く。第1遺構面は遺物包含層である灰色粘質土の上面、第2遺構面は遺物包含層である暗灰色シルトの上面、第3遺構面は無遺物層である暗黄褐色土の上面である。

#### 第1遺構面

中世頃の遺構面で、溝1条、ピット5基を検出した。

#### SD101

調査区の南半で検出した、南北方向の溝である。北側は攪乱で破壊され、南側は調査区外に延びるため全長は不明である。幅0.4~0.6m、深さ約10cm、埋土は淡灰色砂質土である。遺物は土師器片・須恵器片が出土した。溝の規模・形状・埋土・方向から第33次調査検出の溝SD101に繋がると考えられる。

#### 第2遺構面

奈良時代から古墳時代後期と考えられる遺構面で、掘立柱列2列、溝2条、落ち込み1

#### 検出遺構

基を検出したほか、ピットを23基検出した。

#### 掘立柱列1

調査区の北半で検出した、奈良時代頃の規模の大きな南北方向の柱列である。柱間は1間以上を確認した。調査区が狭く、北側は調査区外に続くため規模は不明である。掘立柱建物か塀か不明なためここでは単に柱列とする。全長3.0m以上、柱間は2.0mである。

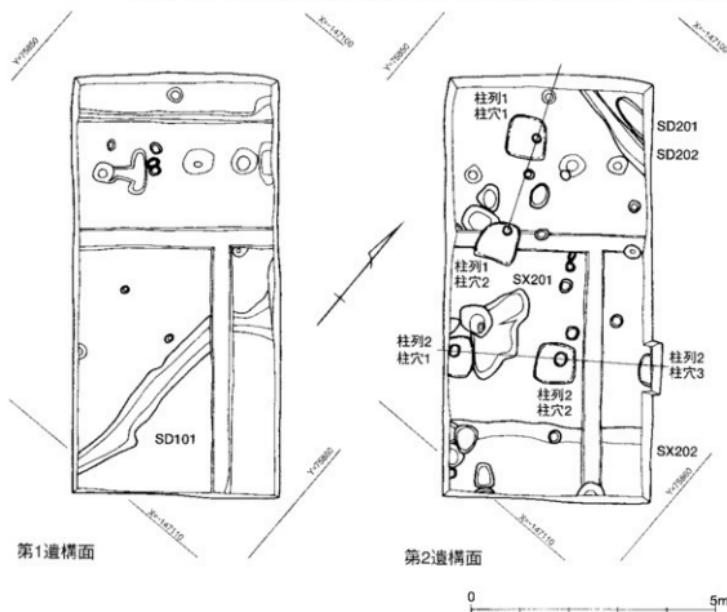


fig. 165 第1・2遺構面平面図

北側の柱穴1には柱根と根石が存していた。掘形は隅丸方形で一边は約80cm、深さ50~60cm、柱根や南側の柱穴2の柱痕から柱の直径は約20cmと推定できる。柱列の方向はいわゆる国土座標に対して23度西に振っている。遺物は須恵器片・土師器片が出土した。

**掘立柱列2** 調査区の中央南寄りで検出した、奈良時代頃の規模の大きな北東から南西方向の柱列である。柱間は2間分を確認した。調査区が狭く、両側は調査区外に続くため規模は不明である。柱列1同様にここでは単に柱列とする。全長4.2m以上、柱間は2.2mである。中央の柱穴2には根石が存していた。掘形は隅丸方形で一边は約80cm、深さ約40cm、西側の柱穴1や中央の柱穴2の柱痕から柱の直径は約20cmと推定できる。柱列の方向はいわゆる国土座標に対して53度東に振っている。遺物は須恵器片・土師器片が出土した。

S D201 調査区の北隅で検出した東西方向の溝である。1.0m分を確認したが、東端は調査区外に続くため全長は不明である。幅0.4m、深さ約40cm、埋土は上から順番に暗茶灰色砂質土、暗褐色砂質土である。土師器片が出土したが、時期は不明である。

S D202 S D201の南隣で検出した東西方向の溝である。2.2m分を確認したが、東西両端は調査区外に続くため全長は不明である。幅0.2~0.4m、深さ5~10cm、埋土は暗灰色炭混じり砂質土である。土師器片が出土したが、時期は不明である。

S X201 調査区の中央で検出した不整形の浅い落ち込みである。長さ2.1m、幅1.1m、深さ約5cm、埋土は灰色砂質土である。須恵器片・土師器片が出土したが時期は不明である。

S X202 調査区の南端で検出した、古墳時代後期の浅い落ち込みである。長さ4.0m、幅1.5m分を確認したが、調査区外に続くため規模は不明である。深さ約20cm、埋土は淡灰色砂質土である。須恵器片・土師器片が出土した。



fig. 166  
第2遺構面全景

- 第3遺構面 古墳時代前期頃の遺構面で、溝1条、ピット5基を検出した。
- SD301 調査区の南半で検出した北西から南東方向の溝である。1.8m分を確認したが、北西端は調査区外に続くため全長は不明である。幅0.2~0.3m、深さ10~15cm、埋土は暗茶灰色砂質土である。土師器片が出土した。

**3. まとめ** 上沢遺跡はこれまでの調査によって弥生時代前期・弥生時代後期から古墳時代初頭・奈良から平安時代・中世の遺構面を持つ大規模複合遺跡であることが解明されているが、中でも奈良から平安時代の様相は特筆される。規模の大きな掘立柱建物、精巧な井籠組の井戸が検出され、巡方、鉗具、銅鏡、円面鏡、土馬が出土したように一般的な集落ではあまりみられない遺構や遺物が存在するため、古代の役所あるいは寺院が存在していた可能性を窺わせる。また隣接する室内遺跡（房王寺跡？）からは軒丸瓦・軒平瓦や塑像の菩薩立像が出土しており、明確な遺構は未確認であるが当時の寺院の存在が推定できる。現在は住宅地であるが、この一帯には当時古代寺院を建立することのできた有力者が存在していたことはほぼ確実と言えよう。

今回の調査地点は上沢遺跡の推定される範囲内でも東端部にあたり、微地形的に見ると東方へは緩やかに傾斜して上沢・下沢の地名の由来になったと考えられている低湿地へ至る。そのような位置にも奈良時代頃の規模の大きな掘立柱構造物が存在していたことは、当時の上沢遺跡ではかなり広範囲に規模の大きな掘立柱建物が建てられており、存在していた有力者の勢力の程が窺えよう。

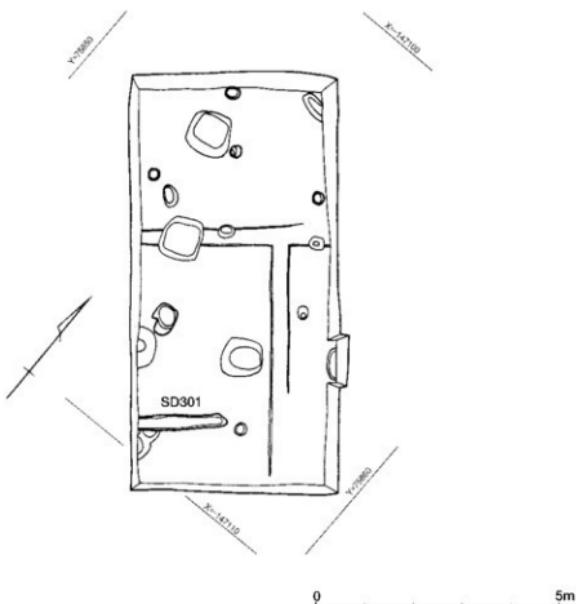


fig. 167  
第3遺構面平面図

## 第36次-I調査

- 1. 調査の概要** 今回の調査は、計画建物の工事影響範囲内について掘削深度T.P.10,200mまで実施した。
- 基本層序** 現地表下10~40cmまでは盛土及び旧耕土となっており、その下層に第1遺構面基盤層である乳茶色砂質土（層厚10cm）、その下層に第2遺構面基盤層である茶灰色シルト質細砂（層厚15cm）、間層である茶褐色砂質土（層厚5cm）、第3遺構面の包含層である淡褐色砂質土（層厚5cm）が続き、第3遺構面基盤層である淡黄褐色シルト質極細砂となる。
- 第1遺構面** 調査区の北端で土坑1基、西端で土坑1基、東端でピット1基を検出した。  
遺物は、土師器の小片がSK01・02から出土した。また、SK01からは自然石を砥石として使用していたものが火を受けた状態で出土した。  
遺構面の時期は、中世と考えられる。
- 第2遺構面** 調査区の南半分でピット4基を検出した。特に南西隅に集中しており、調査区内では建物として認識できるものでない。ただしSP03は、南北60cm、東西80cm、深さ40cmの規模をもつもので、当該地区の南西方向に建物が存在するものと考えられる。  
遺構面の時期は、奈良時代と考えられる。
- 第3遺構面** 調査区の北東隅で円形の竪穴住居1棟、西端で土坑2基、南半部で南北に流れる溝1条を検出した。弥生時代中期の遺構面と考えられる。

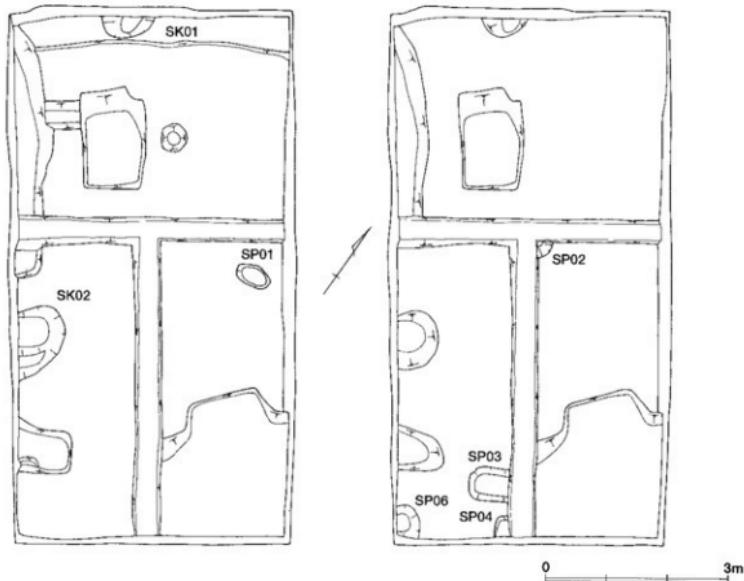


fig. 168 第1・2遺構面平面図

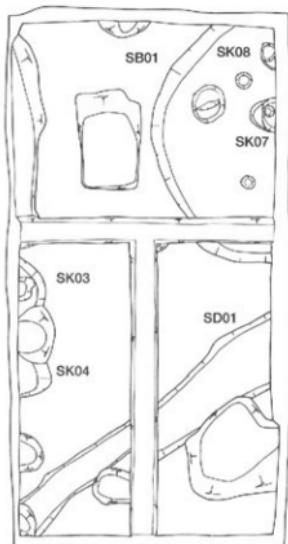
**S B01** 東半分が調査区外に延びるため本来の規模は不明であるが、復元直径が約4.5mとなる円形の竪穴住居である。周壁溝は検出していない。住居内からは、柱穴2基と土坑3基を検出した。土坑内からは特に埋納されたような遺物は出土していない。住居内では、弥生時代中期の遺物が床から遊離した状態で出土しており、S K07も1層上の埋没土から切り込んでいることから、床の貼り替えなどの改築が行われた可能性がある。

**S D01** 幅0.5~1.0m、深さ5cm程度の浅い溝である。出土遺物はなかったが、S B01と同一面で検出したことから、弥生時代中期のものと考えられる。

**S K03・04** ともに西半分が調査区外に延びており、また第1遺構面のS K02によって削平されており、本来の規模は不明である。

## 2. まとめ 今回の調査では、3時期の遺構面を検出した。

第1遺構面では、遺構・遺物とともに希薄であり、中世の段階では、当調査地は集落域から離れた地点にあたるものと考えられる。第2遺構面では、調査地の南端で大型の柱穴を検出しており、南の調査区外に掘立柱建物が存在する可能性が考えられる。第3遺構面では、周辺の調査では未確認であった弥生時代中期後半の遺構を検出した。当該時期の遺構は5m東に離れた第34次調査では確認していないことから、当調査地は集落域の東端にあたるものと思われる。なお第34次調査においては庄内期の遺構面を確認しているが、今回の調査では、第2遺構面と第3遺構面の中間層で精査を行ったが、遺構は確認していない。



0 3m

fig. 169 第3遺構面平面図

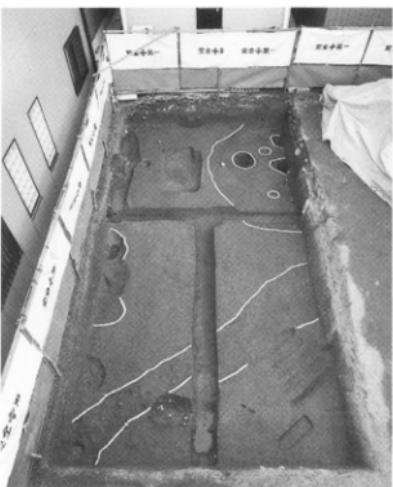


fig. 170 第3遺構面全景

## 第36次-II調査

**1. 調査の概要** 今回の調査地は、上沢遺跡におけるほぼ南東の端と考えられている位置にあたる。調査は、工事影響深度（標高約6.9m）までの深さについて実施した。

確認した遺構面は、1面である。周辺地における既調査結果から、標高6.9m以下についても古い時期の遺構面が存在する可能性が考えられるが、今回は未確認である。

**基本層序** 今回の調査地は、北側に厚い盛土を施し、標高7.4mから8.3m程度の高さを地表面とする、北から南へ急激に下がる傾斜地となっている。この盛土の下層に現代か近代の耕土が標高7.3m前後から、20~30cmの厚さで堆積している。この耕土は東西方向はほぼ水平で、南北方向は、自然地形に沿って緩やかに南へ下がる。その下層は標高7.0m前後に厚さ10cm程度の洪水層と考えられる砂利層が堆積し、古墳時代から10世紀頃の遺物が出土している。この層は調査区北西隅の、調査区のなかで最も標高の高い部分では存在しない。

この洪水層の下層で、遺構面基盤層である淡青灰色シルト質粘土上面を検出した。遺構面も北が高く、南が低くなり、標高は、北西隅で7.3m前後、南東隅で6.9m前後である。

**検出遺構** 検出した遺構の数は多くない。調査区のはば中央を北から南へ流れる溝状の遺構を1条検出した。この溝状遺構を境に以南は湿地性の土壤、以北は居住可能な微高地に隔てられ可能性も考えられるが、後世の削平のため、溝状遺構より北側で遺構を確認していない。

この溝については、標高6.9m付近で確認したため、工事影響深度との関係で、全体を調査するには至らなかった。そのため、遺構内に2ヶ所にトレンチを設定して、部分的に遺構の深さや埋土の堆積の状況を確認した。その結果庄内式期（約2000年前）のものと考えられる土器が出土し、遺構が埋没したのは当該期の可能性が高い。

**溝状遺構** 幅約2.6mで、トレンチ調査で確認した深さは50cm前後である。埋土の堆積状況から、一定期間水路の状態で存続したと考えられる。最下層には、多くの植物遺体が混じる。

出土した土器は小片であるが、庄内式期のものが多い。最上層からは、須恵器が出土したが、ほぼ溝が自然埋没した最終段階の、ごく細い流れの時期を示していると考えられる。

以上から、この遺構は、庄内式の時期に機能していたものが徐々に埋まり、須恵器が使われていた時代には、完全に埋没していたものと考えられる。

溝状遺構の性格については、人為的に掘削された溝と、自然流路あるいは小河川という、2つのものが考えられるが、自然河川としてはやや不自然な方向からの流れが指摘でき、一直線に微高地の裾に沿って走る状況からは、

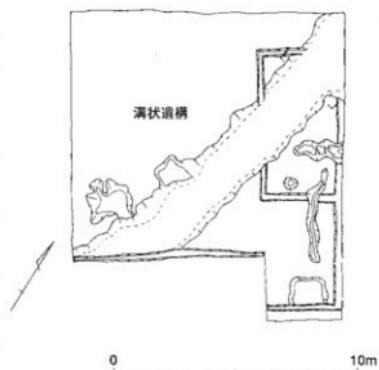


fig. 171 調査区平面図

溝あるいは水路である可能性が高い。ただし、トレンチ調査の結果からは断定するまでには至っていない。

**断ち割り** 遺構面の下層については、工事影響深度より高い標高で遺構面を検出した北西部において、トレンチを設定して確認した。その結果、基盤層の下層には、黒褐色粘土、黒色礫混じり粘土、黒灰色粗砂が順に堆積しており、湿地性の堆積物のようである。何れの層からも極少量、摩滅顯著な弥生土器と思われる土器片が出土したが、遺構は検出していない。

## 2. まとめ

以上の調査結果から、当調査地については、次のような時代の変遷を考えることができる。

弥生時代には、当地は沼沢地のような湿地であったと考えられる。庄内式期では、北東から南西方向に向けて流れる溝が造られるが、この溝は、微高地とその下の小さな谷を隔てるようである。自然の小河川の可能性も残るが、恐らく排水、治水、地区境などの何かの目的で掘削されたものと考えられる。遺構は徐々に埋まったようで、その後10世紀までの状況は不明である。庄内式期遺構面の上層に堆積している砂礫層の存在から、10世紀頃洪水におそわれたことが判る。10世紀以降も集落が存在した可能性が周囲の状況から推測できるが、後世の田圃造成による削平のため不明である。

今回の調査では、主に庄内式期の状況を確認した。遺構の密度が粗く、当調査地付近が上沢遺跡の南の端であるという、從来からの予測を補強する結果となった。人工水路の可能性のある溝を確認したことと、遺跡の当時の景観を知る手がかりを得たが、今後の調査成果によって、その機能、規模、構造などについて、更に検討を進める必要がある。



fig. 172 調査区全景

## ご ばんちょう 21. 五番町 遺跡 第7次調査

### 1. はじめに

五番町遺跡は、市営地下鉄建設に伴う試掘調査ではじめて発見された遺跡である。以後これまでに、6回にわたる発掘調査が行われており、縄文時代、奈良時代から平安時代及び中世の遺構・遺物が確認されている。

今回の調査は、山手幹線拡張工事に伴うもので、平成11年4月に実施した試掘調査で埋蔵文化財が確認されたので、発掘調査を実施した。

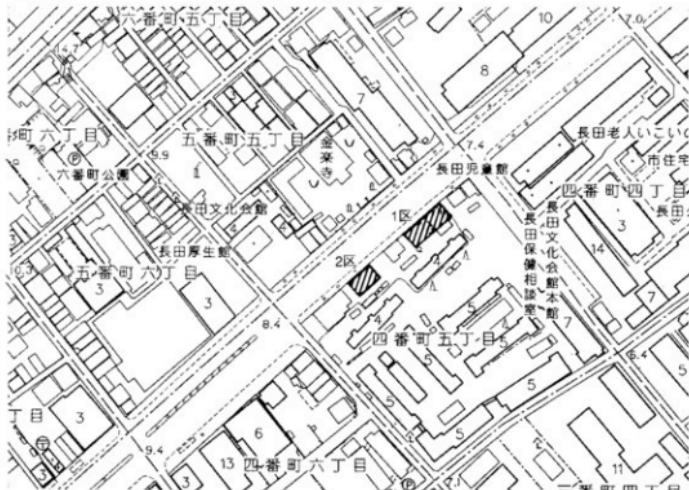


fig. 173

調査地位置図

1 : 2,500

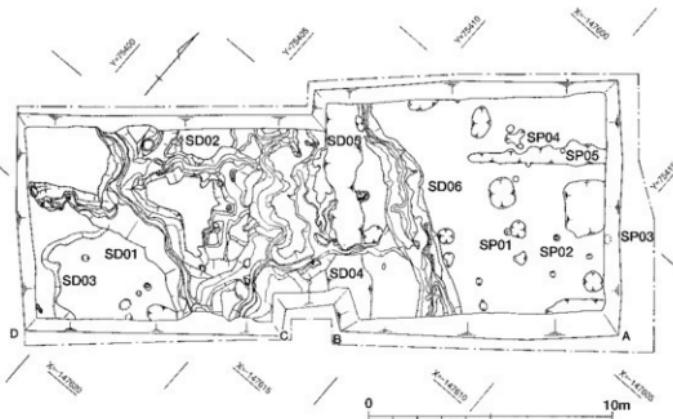


fig. 174

1区平面図

2. 調査の概要 今回の調査区は2ヶ所に分かれており、東側の調査区を1区、西側の調査区を2区と呼称し、1区より調査を開始した。

1 区 検出遺構 調査の結果、調査区東部においてピットを数基確認したほか、そのほかでは古墳時代の溝及び流路を調査区内の西部約2/3において検出した。溝及び流路のうち、最も東側で検出したSD06は調査区内をほぼ直線的に流れるが、他は蛇行を繰り返し、また数本の流路が合流しており、切り合い関係も明瞭ではなく本来1本の流路であったかどうかは不明である。SD06以外の流路では上層に古墳時代の遺物が多く含まれており、中層や下層には土器はほとんど含まれていなかった。

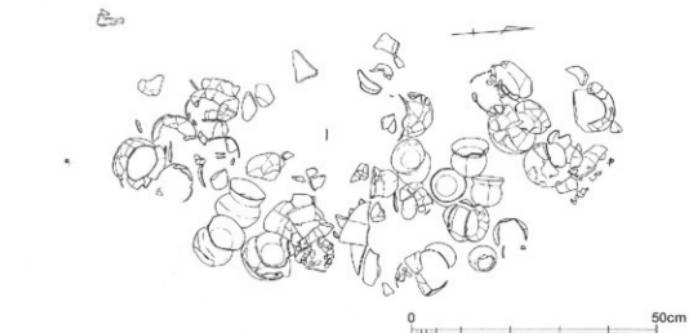


fig. 175  
S D04小型丸底壺  
出土状況実測図



fig. 176  
S D04小型丸底壺  
出土状況



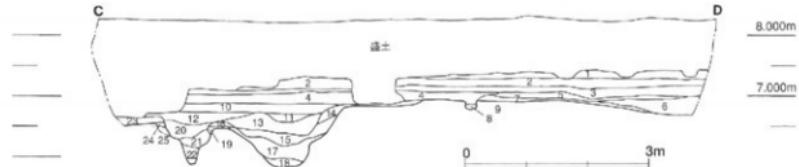
fig. 177 1区全景



fig. 178 S D06

S D04 S D04の上層で、古墳時代前期の小型丸底壺とミニチュアの壺が合わせて約30点集中して出土した。流路がある程度埋没した段階で、何らかの祭祀が行われたものと考えられる。これらの土器の検出中に菅玉1点が出土したため、周辺土壤を採取した。採取した土壤の洗浄作業が未了のため、玉類が更に増えるかどうかは不明である。なお、土器の内部からは種子や玉類などは検出されなかった。

S D06 調査区東部で検出した。幅0.75～1.9m、最深部の深さ26cmで、ほぼ北西から南東方向へ流れるが、北側はやや西向きに流れる方向を変えているようである。古墳時代の土器が多く出土している。調査区東部は遺構検出面が西部に比べて低くなっていること、S D06の上部は削平されているものと考えられる。



- 1・2 旧耕土 3 暗褐(灰)色粘質土～シルト
- 4 淡黒灰色細砂混じりシルト 5 褐灰色シルト質細砂 6 (暗)灰色シルト質細砂
- 7 (黄)灰色シルト質細砂 8 黑灰色シルト 9 淡(黄)灰色シルト
- 10 黒灰(褐)色シルト 11 暗褐色小礫混じり細砂 12 黒灰色シルト質細砂
- 13 茶灰色細砂～中砂 14 褐灰色シルト質細砂 15 黑灰色小礫混じりシルト質細砂
- 16 (黄)灰色シルト質細砂 17 黑灰色シルト 18 淡灰色小礫混じり細砂～中砂
- 19 灰色シルト 20 淡(黒)灰色細砂混じりシルト 21 黑灰色シルト
- 22 (暗)灰色細砂混じりシルト 23 淡(黄)色小礫混じりシルト 24 黄灰色シルト質細砂
- 25 淡青灰色シルト質細砂 26 淡灰色中～粗砂

fig. 179 1区西南壁断面図

SP01～05 調査区東端部でピットを5基検出した。等間隔で並んでおり、同一の建物を構成するものと考えられるが、調査区外に延びていると考えられるため、本来の規模は不明である。調査区内で検出した規模は、東西2間×南北1間である。ピット内からは土器が小片しか出土していないため、詳細な時期は不明である。

2 区 遺構・遺物は検出されず、洪水砂が溝状に堆積した痕跡のみを検出した。

3. まとめ 今回の調査では、1区において古墳時代の流路を検出した。SD06をはじめ、当該時期の土器が比較的多く出土した。特にSD04内でまとまって出土した小型丸底壺は注目される資料である。流路がある程度まで埋没した段階で祭祀が行われたことを示すものである。土器の色調には赤色系のものと白色系の2者があり、色調の異なるものを意識的に組み合わせて並べた可能性も考えられる。土器は少しだけ傾いたり、あるいは横倒しの状態で検出したが、起こせば原位置（据えられた状態）に復元が可能である。祭祀の性格や目的などは不明であるが、類例の調査などを行った後に改めて検討を加える必要がある。

五番町遺跡におけるこれまでの調査では、古墳時代の遺構・遺物の良好な検出例がなく、貴重な調査例となった。今回の調査地は五番町遺跡の範囲の東端に位置しているが、性格的にはむしろ、古墳時代の遺構・遺物が多く検出されている三番町遺跡との関連が深い可能性が考えられる。

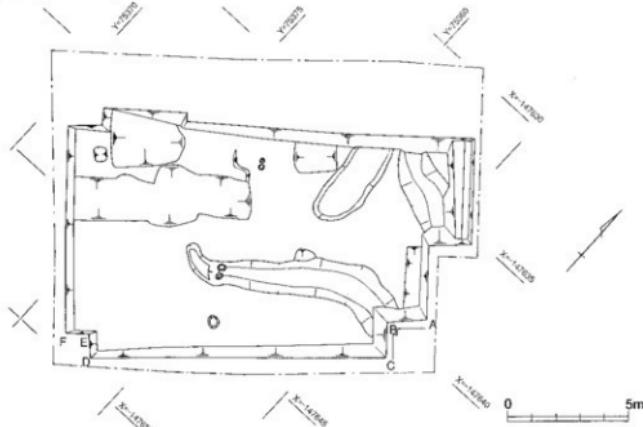


fig. 181 2区南壁断面図

## ながたみなみ 22. 長田南遺跡 第2次調査

### 1. はじめに

長田南遺跡は、六甲山系西部南麓の新湊川と苅藻川の合流点付近に位置する。この付近は、式内社である長田神社を中心として、商店街、住宅街が形成された地区である。

調査地周辺は市街地形成の時期が早く、遺跡の分布が明確でなかったが、昭和50年代後半以降に実施した発掘調査の成果により、次第に遺跡の様相が明らかになりつつある。

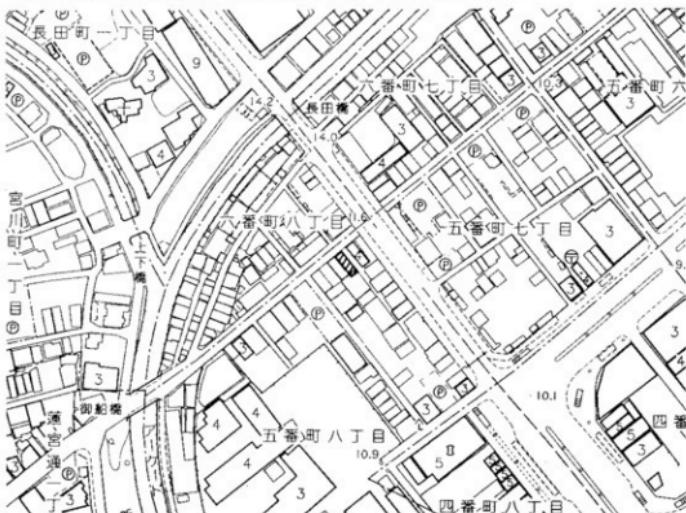
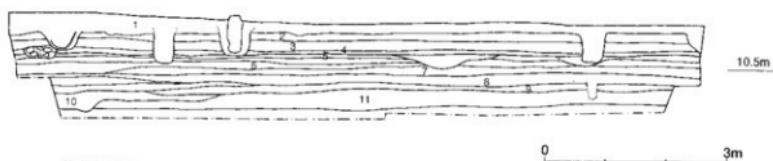


fig. 182  
調査地位置図  
1 : 2,500



- 基本土層名
- 1 瓦礫混じり砂質土（現代整地土）
  - 2 黒灰色粘性砂質土（耕作土）
  - 3 黄灰色粘性砂質土（床土）
  - 4 黑褐色粘質土（弥生時代後期末頃の土器が多く含む）
  - 5 暗褐色粘質土（弥生時代後期末頃～平安時代末期の遺構検出面）
  - 6 暗褐色混練粘質土（土器はほとんど含まない）
  - 7 暗褐色粘質土（弥生時代中期～後期の土器含む）
  - 8 棕色粘質土（弥生時代中期～後期の遺構検出面）
  - 9 黄褐色混じり灰褐色シルト（縄文晩期終わり頃の土器を含む）
  - 10 暗褐色泥シルト（南端で確認された流路状の落ち込み、縄文時代晚期～弥生時代前期頃の土器を含む）
  - 11 黄灰色砂質シルト～極細砂（縄文時代晚期～弥生時代前期頃の遺構検出面）

fig. 183 調査区西壁断面図

2. 調査の概要 平成7年1月17日の阪神・淡路大震災では、この周辺は、古い木造家屋が大きな被害を受けた。今回の調査は、震災によって倒壊した個人住宅の再建工事に伴うものである。

調査は、残土置場の確保のため、南半部と北半部に2回に分けて実施した。

現地表高は11.4m前後である。

基本層序 現地表面以下の土層は、以下のとおりである。

①瓦礫混じり砂質土（現代整地土）

②黒灰色粘性砂質土（耕土）

③黄灰色粘性砂質土（床土）

④黒褐色粘質土（弥生時代末頃の土器を多く含む）

⑤暗褐色粘質土（弥生時代末頃から平安時代末期の遺構面）

⑥暗褐色混礫粘質土（土器はほとんど含まない）

⑦暗褐色粘質土（弥生時代中期から後期の土器含む）

⑧褐色粘質土（弥生時代中期から後期の遺構面）

⑨黄褐色混じり灰褐色シルト（縄文晚期終わり頃の土器を含む）

⑩暗灰褐色シルト（南端で確認された流路状の落ち込み、縄文時代晚期から弥生時代前期頃の土器を含む）

⑪黄灰色砂質シルト～極細砂（縄文時代晚期から弥生時代前期頃の遺構面）

現地表面から④層上面までは50～60cm、⑪層上面までは約1.2m程度の深さがある。

今回の調査では、3面の遺構面を確認した。

第1遺構面 弥生時代末頃と平安時代末期の遺構を同一面で確認した。

調査区北半部で、何れも北東から南西方向に流れる弥生時代末頃の溝を2条検出した。

また、調査区中央部で北西から南東方向に一列に並ぶ平安時代末期の柱穴4基を確認した。





fig. 185 北半部第1遺構面全景



fig. 186 北半部第2遺構面全景

S D101 検出長約3m、幅約1~1.1m、深さ約15cmを測る。

S D102 検出長約3.2m、幅約40cm、深さ約20cmで、建物の基礎によって一部が破壊されている。ともに断面形が浅い皿形を呈し、弥生時代末頃の土器が出土している。

S P101～104 柱穴は、1.9～2mの間隔で一列に並んでおり、柵列または掘立柱建物の柱穴である可能性が高い。平安時代末期の土器が出土した。

第2遺構面 弥生時代中期から後期の遺構面と考えられる。

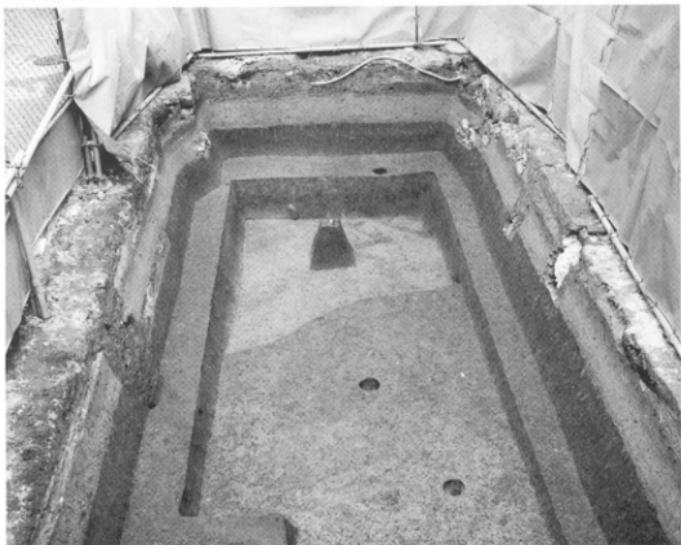


fig. 187  
南半部第3遺構面  
全景

ピットを13基確認した。何れも直径20cm、深さ20cm程度のものである。調査範囲内では、柵列や掘立柱建物としてのまとまりは確認できなかった。ピットからは、ほとんど遺物が出土しないため性格な時期は判らないが、弥生時代中期から後期の土器含む層を除去した段階で検出したことから、ほぼ当該時期の遺構であると判断される。

**第3遺構面 検出遺構** 縄文時代晚期から弥生時代前期頃の遺構面と考えられる。南半部で、流路状の落ち込みを1条検出した。

**S D301** 東・西側がともに調査区外に延びるが、調査区内で最大幅約2.7m、深さ約30cmを測る。埋土はシルトであり、流速の緩やかな湿地状を呈していたことが判る。縄文時代晚期から弥生時代前期頃の土器が出土している。

**3. まとめ** 今回の調査では、3面の遺構面を確認した。これまでの周辺の調査でも縄文時代晚期から中世の遺構・遺物を検出しており、今回の調査成果と概ね対応するものと判断される。

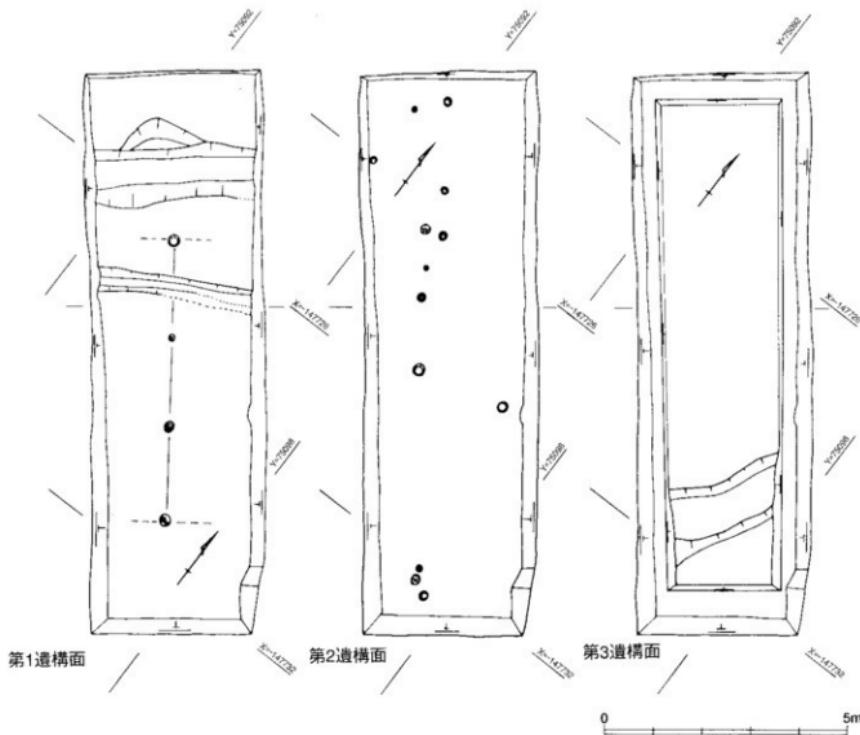


fig. 188 第1～3遺構面平面図

## ながたみなみ 23. 長田南遺跡 第3次調査

### 1. はじめに

長田南遺跡は中央部を流れる新湊川（旧宍粟川）の東岸の沖積地に立地しており、縄文時代から中世の複合遺跡である。

今回の調査は、店舗の建設工事に伴うものである。

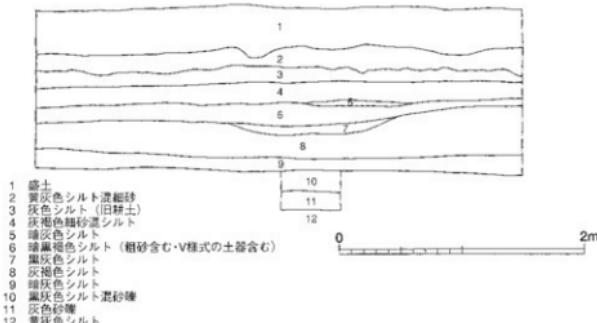
周辺におけるこれまでの調査では、弥生時代中期後半から庄内期の窪穴住居や縄文時代晩期の流路などを確認している。



### 2. 調査の概要

現地表下の土層は、盛土（厚さ40cm）の下層約50cmで遺物包含層（厚さ10cm）があり、弥生時代の遺物を含む。その下層の灰褐色シルト上面で弥生時代後期の遺構を検出した。これを第1遺構面とする。この下面には流路が存在しており、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての土器が出土している。

fig. 190  
調査区西壁断面図



- 第1遺構面　　浅い落ち込み状の土坑を3基と溝を2条検出した。時期は何れも弥生時代後期に属するものと考えられるが、中世段階の水田によって削平を受けており、何れも性格は不明である。
3. まとめ　　周辺地の調査成果と同様に、弥生時代後期の遺構を検出した。しかし、削平を受けているため、調査地付近で住居址等の遺構が希薄になっていくかどうかなどの、集落内部における当調査地の位置づけなどについては不明である。

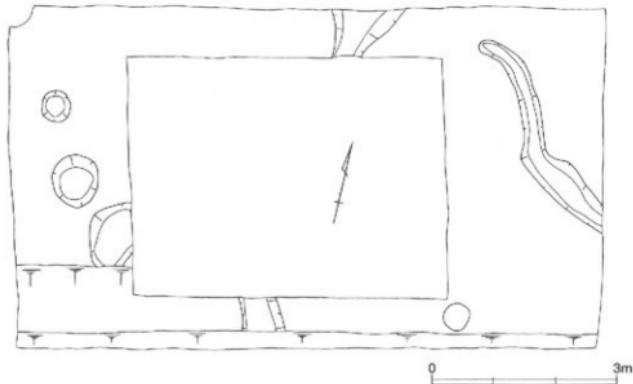


fig. 191  
調査区平面図



fig. 192　調査区西部全景



fig. 193　調査区東部全景

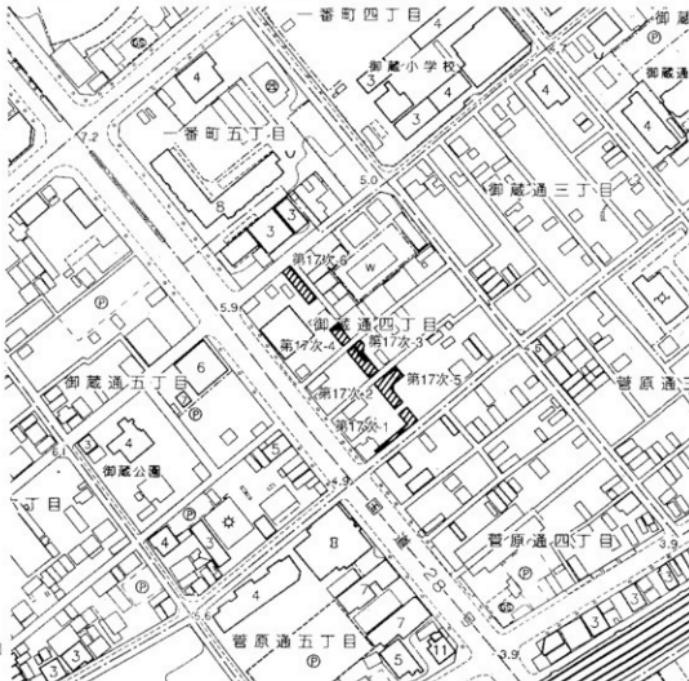
## 24. 御蔵 遺跡 第17次-1~6調査

### 1. はじめに

御蔵遺跡は、震災後実施している区画整理事業に伴う発掘調査で飛躍的に解明されてきた遺跡である。辺縫川左岸の沖積地に広がるこの遺跡は、庄内期、奈良時代・平安時代、中世の最大3面が確認されている。

庄内期においては、生活面としてあまり安定していなかったようで、土器が集中して出土する範囲があるものの、遺構としてはあまり明確ではない地点が多く、河道・溝等が検出されている。奈良時代は、方形で大型の掘形をもつ柱穴から構成される掘立柱建物を数棟検出し、瓦等の出土を確認している。特に、第3次調査においては棟方向を一にする総柱の建物を検出していることから、倉庫の可能性も考えられている。平安時代は、人骨が残存していた木棺墓を數基検出し、須恵器・土師器が棺内外より出土している。

今回、御蔵遺跡内の東部にあたる御菅東地区において、区画整理事業に伴う区画街路建設に先立って発掘調査を実施した。今回の一連の調査については、既に平成12年度に、「御蔵遺跡 第17・38次発掘調査報告書」を刊行しており、本年報では、調査の概要を示すに止める。よって、調査の詳細な内容については、報告書を参照されたい。



## 2. 調査の概要

- 17次-1 飛鳥時代頃の掘立柱建物1棟、土坑1基、溝状遺構2条、ピット3基、中世頃の溝状遺構1条等を検出した。
- 17次-2 飛鳥時代の掘立柱建物を2棟を検出している。
- 17次-3 工事影響深度の関係で、一部については遺構面よりも浅い深度までで調査を終了したが、調査区の西半分が深さ約50cmで浅く落ち込んでいる状況を確認した。他に顕著な遺構は検出していないが、遺構面自体が削平されている可能性が高い。落ち込みからは土器・須恵器が少量出土しており、おそらく奈良時代と考えられる。
- 17次-4 奈良時代の土坑2基、溝3条、ピット9基、落ち込み1ヶ所を検出した。
- 17次-5 奈良時代の溝4条、ピット1基、落ち込み1ヶ所を検出した。
- 17次-6 奈良時代の土坑1基、溝3条、ピット5基を検出した。
3. まとめ 以上のように、今回御菅東地区区画整理事業地内で実施した調査では、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物などの遺構を検出した。同様な時期の掘立柱建物は、御菅西地区でも多く確認している。当該時期の掘立柱建物の柱穴は大型の掘形をもつものであり、一般集落の建物と捉えるよりは、官衙的な性格の強いものと捉える方が妥当と考えられる。柱穴からは少量の土器の細片しか出土しないことが多く、建物の厳密な意味での同時性など、困難な問題もあるが、詳細については報告書を参照されたい。

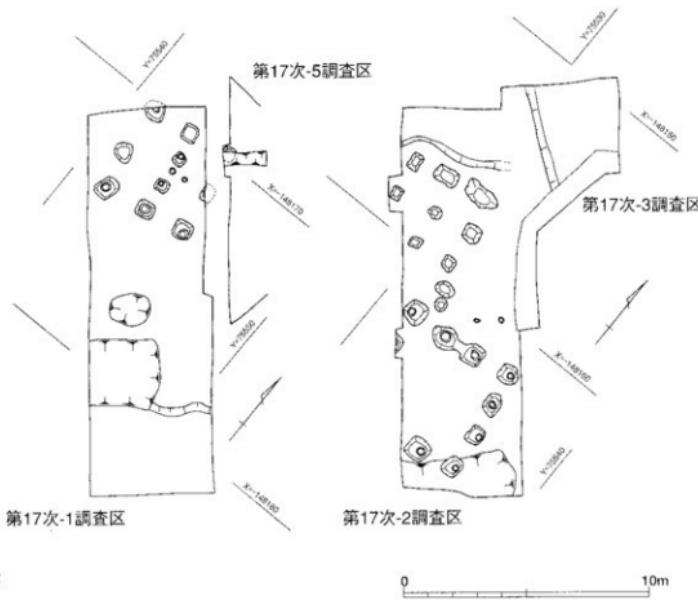


fig. 195  
第17次-1・2  
調査区平面図

25. 御藏跡 第31次-1・2調査

1. はじめに

御藏遺跡は、六甲山南麓の沖積地に立地しており、茹藻川左岸に位置する。

調査地周辺は震災の被害が著しかった地区であり、その復興事業として区画整理事業が施行され、復興共同住宅建設、街路工事、個人住宅建設等に伴う調査を実施してきている。

今回の調査は、震災復興御賛地区土地区画整理事業に伴う国道28号線拡幅事業に先立って実施したものである。調査は2回に分けて実施した。

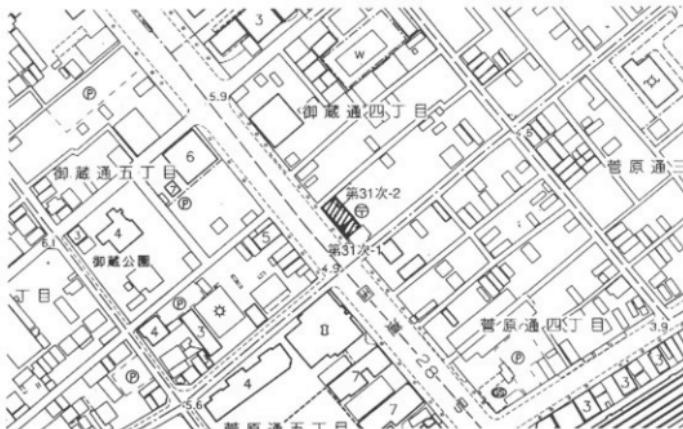


fig. 196  
調査地位置図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

基本層序

第31次-1調査と第31次-2調査では、基本層序に若干の違いがあるが、ここでは、第31次-1調査の層位をもって基本層序として示す。

現地表面以下の土層は、現代盛土および旧耕土、黄褐色砂泥、褐灰色砂泥（奈良時代から中世）、暗褐色砂泥（奈良時代遺物包含層）、灰褐色泥砂（遺構面基盤層）となる。以下の層は砂層の堆積層であった。

31次-1

現地表は標高約5.1mで、遺構面は標高約4.4mで検出した。遺構面はほぼ水平である。

北半部は建物基礎などの擾乱が遺構面以下まで及んでおり、遺物包含層・遺構面は残存していない。南半部は擾乱の影響がほとんどなく、比較的良好に遺構面を保っている。

榆次遺稿

輸出した遺構は、土坑、ピット、落ち込みなどである。

ビットは、平面形が円形のものと方形のものが存在する。円形のビットは径30cm程度、方形のビットは概ね50×30cm程度、深さは10cm未満と浅い。周辺調査地で検出した掘立柱建物の軸方向に整合するビット列も存在するが、建物としての確認には至らなかった。

出土遺物

遺物包含層や遺構から飛鳥時代から奈良時代、平安時代の小片の遺物が出土している。

31次 - 2

検出した遺構面の標高は、4.5m前後である。

北半部

遺構面が損なわれた部分が多く、ピット2基と溝状遺構が1条検出したに止まる。

二四〇

直径30cm、深さ10cmの浅いもので、2基とも遺物は出土しなかった。

- 溝状遺構 遺構面の残存する北端部で、南肩部分を検出した。溝状の遺構と考えられるが、大半が攢乱によって失われており、詳細は不明である。少量の土師器・須恵器が出土した。
- 南半部 ほぼ全面に遺構面が残存し、ピット12基と落ち込み状遺構4ヶ所を検出した。
- ピット 概ね直径40~60cm、深さ20~40cmである。P 4・6・8は柱痕を検出し、一直線上に並ぶため建物の一部と考えられる。他にP 7・12にも柱痕がみられる。
- 落ち込み 概ね深さ10~20cm程の深さで、規模等は調査区外へ延びるため不明である。SX01とSX03の上面検出中にそれぞれ馬歯と猪歯と思われる動物の歯が出土している。

3. まとめ 今回の調査では、飛鳥時代から平安時代の土坑、ピットなどの遺構を検出した。攢乱を大きく受けしており、今回得られた資料は断片的なものといえるが、掘立柱建物の一部と考えられるピットも検出している。周辺の調査では、南北棟の掘立柱建物がみられ、また、御晉西地区で実施した第3次調査でも、奈良時代の掘立柱建物群を検出している。第3次調査地から国道28号線を挟んだ区域に一定の集落がみられるようである。

掘立柱建物の方位は現在の町割りとは異なり、真北方向に近い。現在の町割りやこれに基づく条里地割りとの関係、条里地割りの可否や成立の時期などは今後の課題である。

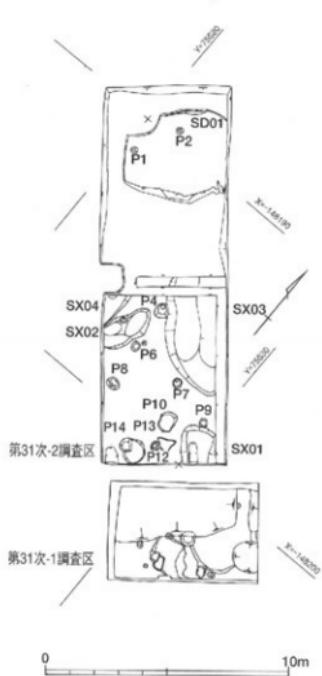


fig. 197 調査区平面図



fig. 198 第31次-2調査区南半全景

## 26. 御藏 遺跡 第21・28・30・32・35次調査

### 1. はじめに

御藏遺跡は、六甲山系南麓の沖積地上に立地し、明治時代に付け替えられた新湊川と合流する茹藻川の左岸に位置する。今回の調査地は、西側に国道28号線が通り、平成7年の阪神・淡路大震災前までは、住宅、商店、町工場、ビル等が混在する地域であった。

また、この周辺は震災の被害の著しかった地区であり、その復興事業として区画整理事業が施工され、復興共同住宅建設、街路工事、住宅の建て替え等に伴う発掘調査を相い次いで実施している。

今回御荳東地区内において、個人住宅建設等に伴って調査を実施した。以下、その一連の調査の概要である。



fig. 199  
調査地位置図  
1 : 2,500



fig. 200  
調査地近景

## 第 21 次 調査

1. 調査の概要 今回の調査は、震災で焼失した御蔵特定郵便局再建工事に伴うものである。

現地表高は5.1m前後である。調査範囲を任意に北・南・東区に地区分けを行った。

基本層序 表土・整地土層の下層に耕土（黒灰色粘性砂質土）、床土（黄褐色粘性砂質土）、中世頃の耕土と考えられる褐色混じり暗灰色粘性砂質土の堆積層があり、その下に飛鳥時代から奈良時代の土器を含む黒色～黒褐色粘質土が約10cmの厚さで堆積する。その層を除去した、黄褐色小礫混じり粘質土上面で、遺構を検出した。

南区東半部～東区にかけては、黒褐色～暗褐色粘質土が堆積する。この層には、弥生時代末から古墳時代初頭の土器を極くわずかに含んでいる。

現地表面から遺物包含層である黒色～黒褐色粘質土まで約70cmの深さがある。遺構面の標高は4.1～4.4mである。

なお、北区の大半は震災以前の建物基礎工事によって、深く掘削されており、遺構面基盤層である黄褐色小礫混じり粘質土は、島状に残るだけであった。

検出遺構 南区で、掘立柱建物1棟、溝、ピット1基を検出した。

S B01 梁行2間(3.4m)、桁行3間(5.8m)以上の規模をもつ掘立柱建物で、柱掘形が方形または隅円方形の柱穴から構成される。北側に建物基礎工事によって削平されているため、正確な建物規模は不明である。柱間の距離は、梁行方向は1.7m等間隔であるのに対して、桁行方向は、1.7～2.5mの不等間である。建物方位は、N20°～22°Wである。

側柱で構成された建物であるため、土間の建物、倉庫と考えられる。

柱掘形からは遺物がほとんど出土しないため、建物の正確な時期は不明であるが、遺物包含層と掘形内出土の細片の土器から、およそ飛鳥時代から奈良時代の時期に納まるものと判断される。なお、東南隅の柱穴から鉄滓（椀型滓）が1点出土した。

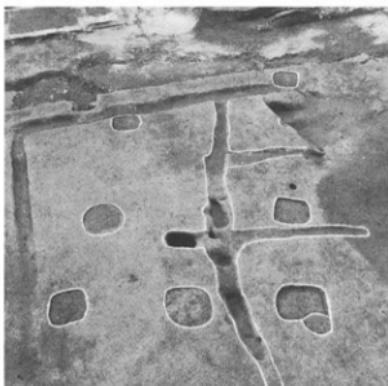
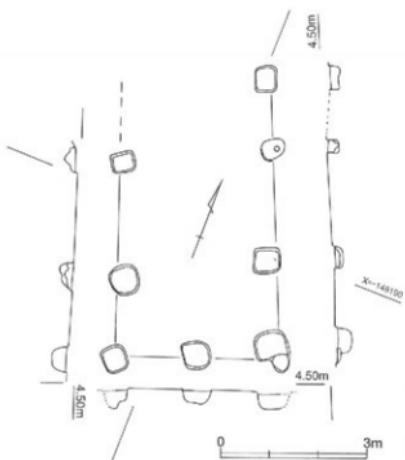


fig. 202 S B01

fig. 201 S B01平面図

**S D01** 長さ約7m、幅約30cm、深さ約15cmの溝で、枝状の小溝（S D02、03）を伴う。S B01の屋内を通るが、その両者の前後関係については不明である。また、性格も不明である。

**S P01** 南区の南西端で検出した円形のピットである。調査範囲の西側に延びる掘立柱建物の柱穴である可能性が考えられる。

**断ち割り** 遺構の調査完了後、南区南西隅と東区で、下層の状況を確認するため試掘坑を設定して調査したが、細砂、シルト層が連続し、遺構・遺物は発見できなかった。

**湿地状地形** S B01の東側では、遺構突出面である黄褐色小礫混じり粘質土は東に徐々に下がってゆき、その上に黒褐色～暗褐色粘質土が厚く堆積する。その層の下位には、弥生時代末から古墳時代初頭の土器を極くわずかに含んでいる。この部分は、調査時でも常に水が滲みだしてくる場所であり、当時も水はけの悪い湿地状地形であったと推測される。

**3. まとめ** 今回の調査では、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物1棟とピットなどを検出した。第3次調査では当該時期の建物群を発見しており、それらの建物群の性格は未だ判然としないが、今回発見された建物は、その建物群の一部を構成するものと判断される。ただし、すぐ東側は、湿地状の地形が広がっていることが判明している。これまでの調査成果から考えると、菟藻川に沿って形成された南北方向の細長い微高地に掘立柱建物群が並び、微高地から外れると、後背湿地が広がるという地形が明らかになってくる。今回の調査地は、まさに微高地から後背湿地に移行していく部分であり、飛鳥時代から奈良時代の遺跡の東端は、およそこの部分で捉えられるのではないかと判断される。

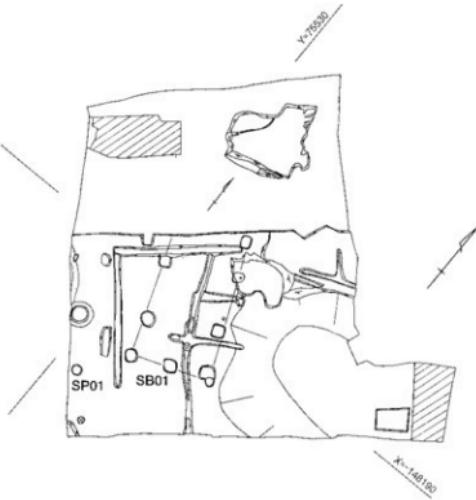


fig. 203  
調査区平面図

0 10m

## 第 28 次 調査

1. 調査の概要 今回の調査地は、これまでの調査で奈良時代の掘立柱建物の検出されている地点に隣接しており、調査前は同様な建物の検出が予想された。

今回の調査区内では暗黒褐色シルトが認められたほか、その上層などに部分的に灰褐色砂混シルト（中世遺物包含層）が存在する。

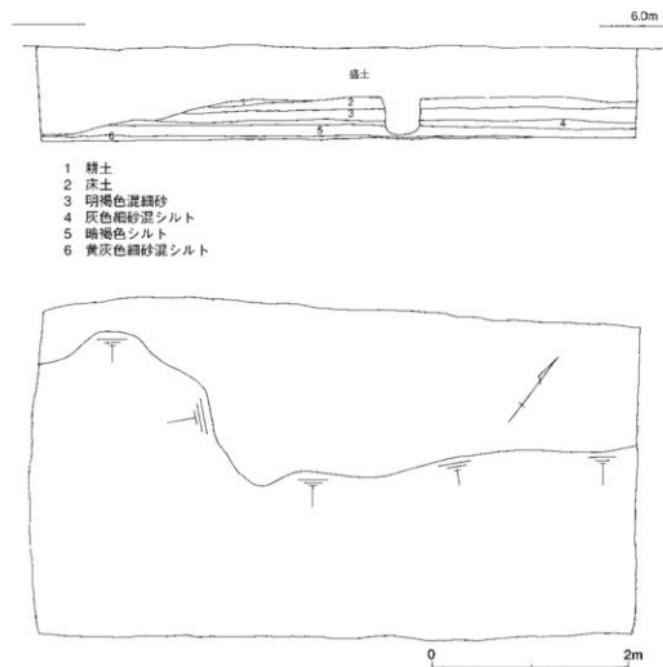
今回の調査においては、断面にてピット、溝などを検出した。

第1遺構面 灰褐色砂混シルトの上面で検出した遺構面である。遺構としては溝1条を検出した。時期としては、平安時代から鎌倉時代にかけてのものを、同一面で検出している。

第2遺構面 灰褐色砂混シルト層を掘り下げた段階で、下面の暗黒褐色シルト上面で検出した遺構面である。擾乱が激しく、ほとんど遺構を確認することはできなかった。

2. ま と め 今回の調査地の南側において実施した調査では大型の柱掘形をもつ掘立柱建物を検出しているが、今回の調査では掘立柱建物は検出していない。

なお、第1遺構面で検出した鋤溝は、現在の地割方向とはほぼ一致しており、御藏遺跡のかなり広い範囲で確認されていることから、この地域での地割方向の決定が少なくとも奈良時代までは遡らず、12世紀から13世紀の間に行われたものと考えられる。



## 第30次調査

- 1. 調査の概要** 現地表面以下の土層は、上層より、表土・整地層、灰色粘性砂質土（耕土）、黄褐色粘性砂質土（床土）、灰黃褐色粘性砂質土（中世頃の耕土）、黒褐色粘性砂質土（遺物包含層）、黄灰色粘性砂質土（遺構面基盤層）である。
- 遺構面は、西半はほぼ水平であるが、中央以東は東に向かって緩やかに下がる。現地表は標高約5.1mであり、遺構面は標高約4.4mで検出する。
- 調査区の北半は、建物基礎などにより大きく攢乱を受け、遺物包含層・遺構面はほとんど残存していなかった。
- 検出遺構** 検出した遺構は、溝、土坑、ピットなどである。
- S K01** 1.3m×0.95mの長方形を呈する土坑である。深さは12cmで、断面は台形を呈する。南辺側には小さな段をもつ。遺物は須恵器坏や須恵器鉢片が出土している。
- S K02** 北半は攢乱のため不明であるが、短辺約1mの楕円形と考えられる土坑で、平安時代初頭と考えられる須恵器が出土している。
- S K03** 1.8m×1.2mの楕円形の土坑で、須恵器・土師器などが出土している。
- S K04** 1.4m×1.0mの卵形の土坑で、底面は凹凸が著しい。埋土に炭をわずかに含む。飛鳥時代から奈良時代と考えられる須恵器坏蓋や、須恵器甕、土師器甕などが出土している。
- S K05** 幅60cm、深さ22cmで、東側は調査区外に延びる。底面で柱痕状の落ち込みを検出した。柱穴の掘形であった可能性が高い。土師器の小片が出土している。
- S P01** 直径30cm、深さ25cmで、柱痕が認められる。土師器と須恵器の小片が出土している。
- S P02** 直径35cm、深さ40cmで、土師器や須恵器が出土している。
- S P05** 直径60cm、深さ28cmで、東寄りに柱痕が認められる。土師器小片が出土している。
- S P07** 40cm×33cmの楕円形で、深さ30cmである。土師器小片が出土している。
- S X01** 北半は攢乱のため不明であるが、径3mほどの円形を呈すると考えられる落ち込みで、深さは20cmである。奈良時代と思われる須恵器や土師器などのほか、瓦片も出土している。

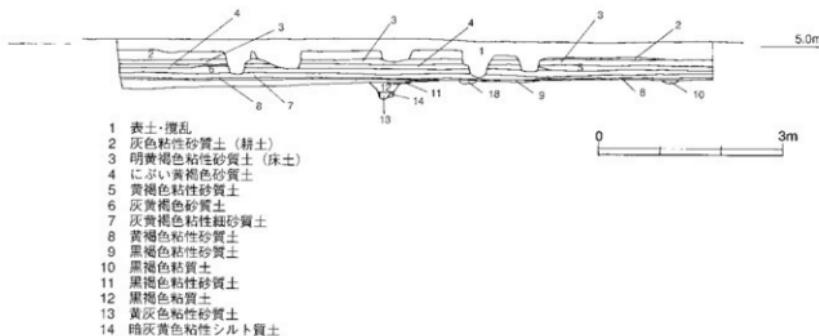


fig. 205 調査区南壁断面図

2. まとめ 今回の調査では、飛鳥時代から平安時代の溝、土坑、柱穴などを検出した。

柱穴は、調査区の制約のため掘立柱建物としてのまとめは不明確であるが、S P05・07は柱穴間距離が1.8mで底面レベルが等しく、掘立柱建物を構成する可能性が考えられ、その場合主軸方位は第21次調査のS B01と合致する。また、S P02・06についても柱穴間距離が1.8mで底レベルが等しく、掘立柱建物の一部である可能性が高い。

これらの柱穴は、他の調査地点の掘立柱建物を構成する柱穴の掘形に比べて、小さく平面形も円形である。掘立柱建物として捉える場合、機能・規模に差異があった可能性が考えられる。そのほか詳細については不明な点も多いが、今後さらに検討を加えたい。

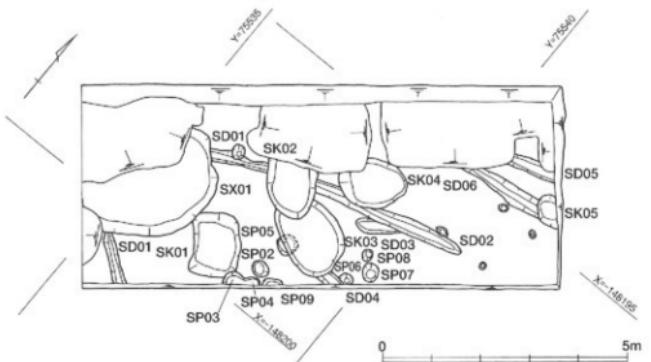


fig. 206  
調査区平面図



fig. 207  
調査区全景

## 第 32 次 調 査

1. 調査の概要 表土・擾乱の下層に旧耕土、旧床土が存在し、中世の耕土と思われる黄褐色砂質土、暗灰黄色砂質土、オリーブ褐色粘性砂質土が堆積する。その下層は黄灰色粘質土、褐灰色粘性砂質土（粗砂混じり）が薄く堆積しており、遺物包含層である黒褐色粘質土となる。この層を除去した黄灰色粘性砂質土上面が遺構面である。
- 遺構面は、東側へごく緩やかに下がる。現地表面は標高約5mであり、遺構面は標高約4.2mで検出する。
- 検出遺構 挖立柱建物、土坑、ピット、溝などの遺構を検出した。
- S B01 調査区西端に位置する掘立柱建物で、調査区内では桁行2間以上、梁行1間以上を検出した。柱間距離は桁行方向が2.3~2.5m、梁行方向が1.7mで、柱穴は50cm程度の隅円方形～楕円形の柱掘形をもつ。S P04は深さ15cmと浅いが、他の柱穴は深さ30cmである。何れも柱痕を確認した。建物方位はN25°Wである。S P02・03から土師器が出土した。
- S B02 調査区東端に位置する掘立柱建物で、桁行2間以上、梁行1間以上を検出した。柱間距離は桁行方向が2.2m、梁行方向が1.7mである。柱穴は直径50cmの円形の掘形をもち、深さは40~55cmである。建物方位はN34°Wで、S B01とは異なる。S P09・11・12から土師器、S P10からは須恵器、土師器、S K01からは土師器が出土した。
- 落ち込み 調査区東側で検出した。S X01・02とも方形を呈するようであり、深さはS X01が数cm、S X02は20cmである。S X02の底面は凹凸が著しい。遺物はS X01からは土師器、S X02からは土師器、須恵器が出土している。
- S B02はこれらの落ち込みが埋没してから後に建てられている。

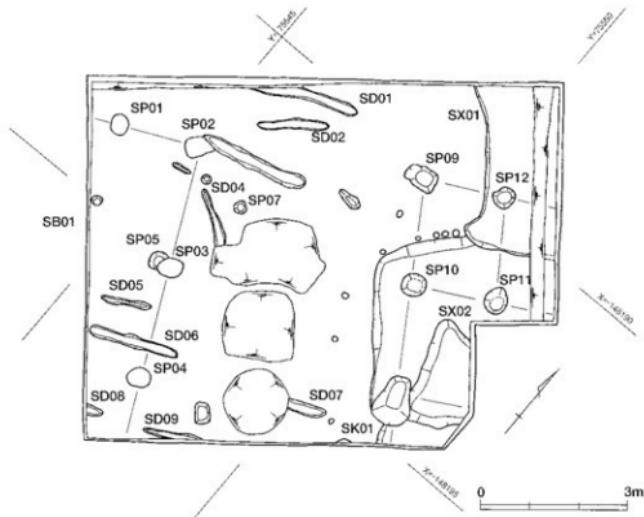


fig. 208  
調査区平面図

## 2. ま と め

今回の調査では、飛鳥時代から平安時代の掘立柱建物、溝、柱穴などを検出した。

S B01は周辺地の調査結果と合わせて検討すると、桁行3間以上、梁行2間(3.5m)で、側柱で構成された掘立柱建物と判明した。

S B02は、東側は調査区外のため不明であるが、総柱の建物と考えられる。

第21次調査では東側に湿地状の地形を確認しているが、今回の調査結果から、これらの掘立柱建物など当該期の遺構が存在する微高地は、若干東側へ張り出していたようである。

以上のような調査結果を得たが、出土遺物の検討が不十分なため、詳細な時期決定は困難である。飛鳥時代から平安時代の建物配置や性格、微地形などについても、周辺での調査によってより明らかになるものと考えられる。

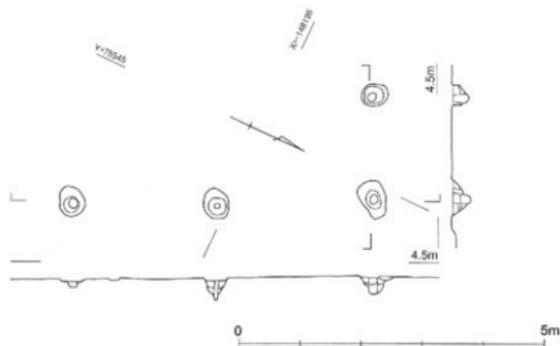


fig. 209  
S B01平・断面図



fig. 210  
調査区全景

## 第 35 次 調 査

1. 調査の概要 現地表面以下の土層は、現代盛土及び旧耕土の下層に、黄褐色系の砂泥層が3層（北壁では2層観察される）が存在し、これらを除去した段階で遺構面を検出した。砂泥層からは少量の中世の土師器・須恵器が出土した。遺物包含層と考えられる層は存在しないようである。また遺構面基盤層も洪水による堆積層によって形成されている。遺構面の標高は4.5m前後である。

検出遺構 溝状遺構、落ち込み状遺構、柱穴を検出した。

SD01 調査区西半部で検出した北西から南東方向に直線的に流れる溝状遺構で、幅45cm、深さ20cmを測る。中央部での断面形状は逆台形状で、水の流れたような痕跡はなく一時期に埋まったと考えられる。断面形状と直線的な点から人為的に掘削された溝と考えられる。

SD02 調査区北西隅で検出した溝状遺構で、幅1.2m、深さ30~60cmを測る。SX02を切る状態で検出した。微量の土師器が出土している。またSD02の東肩部付近で、直径15cm、深さ10cmと直径20cm、深さ20cmの小規模なピットを検出した。

SX01 調査区南西隅では検出した深さ10cmの落ち込み状遺構で、底面には幅40cm、深さ10cmの溝状に凹む部分が検出された。微量の土師器が出土している。

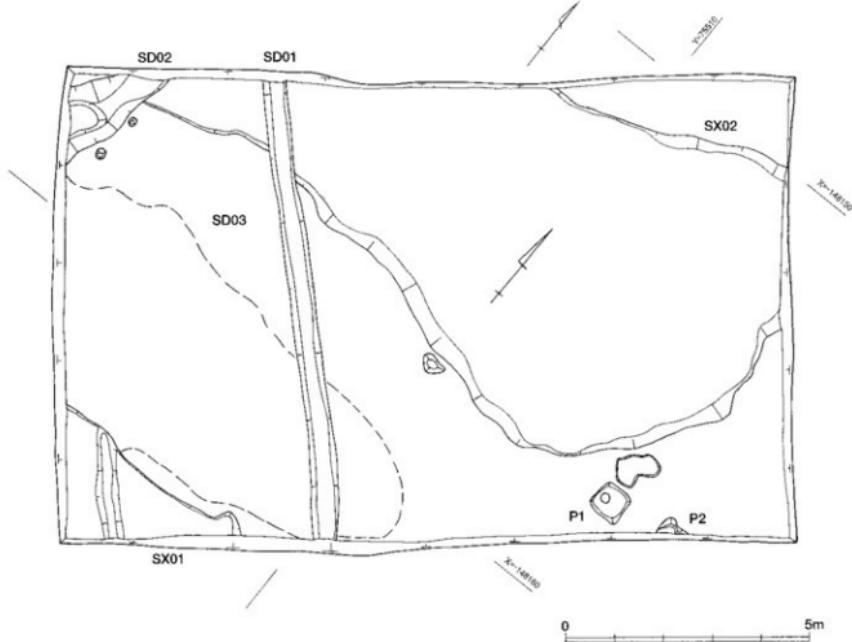


fig. 211 調査区平面図

S X02 調査区北半部で検出した、最大幅7.2m、深さ20~40cmの落ち込み状遺構である。28ℓ入コンテナに2箱程度の遺物が出土した。埋土は大きく3層に分かれ、ほとんどの遺物は上層の灰色混疊泥砂層から出土している。遺物は土師器、須恵器、灰釉陶器、瓦のほか北端部でサヌカイト製石鏡1点が出土した。大きな落ち込み状遺構で、小碟や多くの土器が混じることから整地のような行為も考えられるが、遺構の性格は不明である。

S X02の東側で柱穴を2基検出した。P2は調査外に延びるが、P1とP2は連続し、南東部にひろがる掘立柱建物の一部と考えられる。P1は一辺60~70cm、深さ30cmの方形の掘形をもち、直径20cmの柱痕が観察された。

S D03 調査区南半部では、幅約3mの溝状に観察される黄褐色の粗砂層の堆積層がみられた。断ち割り調査を実施した結果、南・北側に立ち上がるような溝状の堆積は認められず、砂が滞留した洪水砂の末端部分と思われる。古墳時代前期頃の微量の土師器が出土した。

3. まとめ 調査地の国道28号線を挟んで西側の調査では、奈良時代の掘立柱建物群が検出されている。また調査地の南側の調査でも、同時期の掘立柱建物が検出されている。反対に調査地の西北側では掘立柱建物の広がりが見られない。このような周辺の調査状況と当調査区で検出された遺構などから遺跡の北東端にあたるのではないかと予想される。

遺跡の時期は出土遺物から、奈良時代後半から平安時代前半頃と考えられる。

また遺構面を形成する堆積土の出土遺物などから、周辺で検出されている弥生時代や古墳時代の集落が幾度も洪水に襲われた結果が現れているようである。



fig. 212  
調査区全景

## 27. 御藏遺跡 第14次-1~23調査

### 1. はじめに

御藏遺跡は、苅藻川左岸の自然堤防及びその後背湿地に立地する、縄文時代から中世にわたる複合遺跡である。

御藏遺跡の所在する長田区御藏通周辺は、平成7年の阪神・淡路大震災の被害を激しく受けた地区であるが、その後復興事業計画のなかで区画整理事業が実施されるにあたり、事業に先立ち、区画街路部分や個人住宅建設部分について発掘調査を実施している。

これまでの調査では各時期の遺構・遺物が確認されているが、特に、大型掘形の柱穴によって構成される飛鳥時代から平安時代にかけての掘立柱建物群は、当遺跡の官衙的な特徴をよく示すものとして注目される。

今回御藏遺跡西半部において、御菅西地区土地区画整理事業に伴って、区画街路部分の調査を実施した。以下にその概要を示すが、今回の一連の調査については、既に平成12年度に『御藏遺跡 第4・6・14・32次発掘調査報告書』を刊行しているので、調査の詳細な内容については、報告書を参照されたい。

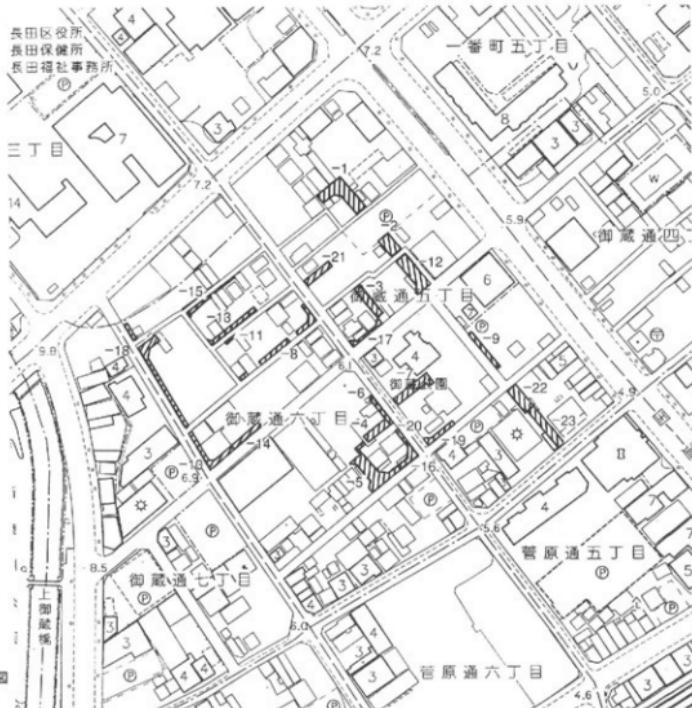


fig. 213  
調査位置図  
1 : 2,500

## 2. 調査の概要

- 14次－1 2面の遺構面を確認した。
- 第1遺構面 現地表面下約70～80cmで検出した奈良時代の遺構面で、溝3条とピットを検出した。
- 第2遺構面 庄内式期と考えられる遺構面で、溝5条、ピット6基、落ち込み1ヶ所を検出した。
- 14次－2 2面の遺構面を確認した。
- 第1遺構面 現地表面下約65cmで検出した、奈良時代から平安時代と考えられる遺構面で、溝10条、ピット2基を検出した。溝は検出状況から、鋤溝と考えられる。
- 第2遺構面 庄内式期と考えられる遺構面で、溝1条、土坑2基、ピット6基を検出した。
- 14次－3 庄内式期の遺構面を確認したが、奈良時代から平安時代の遺構面は遺存していない。  
現地表面下約85cm～1.3mで、溝1条を検出した。遺構面の上層の庄内式期の遺物包含層からは、多量の土器が出土している。
- 14次－4 現地表下約1.5mで、水田層の可能性が考えられる黒褐色土層を検出したが、畦畔は確認されなかった。そのほかにも遺構は確認されず、他の調査区とは違う様相を示している。
- 14次－5 調査対象地内に2×2mの試掘坑を2ヶ所設定し、土層の堆積状況及び埋蔵文化財の広がりについて確認した。下層で14次－4調査区と同様な洪水砂層や湿地性土壤を確認したが、明確な遺構の検出に至らず、この試掘結果をもって調査を終了した。
- 14次－6 隣接する14次－4調査区と同様な土層の堆積状況を確認し、同調査結果と同様に明確な遺構面は確認していない。
- 14次－7 2面の遺構面を確認した。
- 第1遺構面 現地表下約75cmで検出した奈良時代と考えられる遺構面で、溝1条、土坑1基、ピット21基を検出した。ピットのうち4基については、検出状況から、掘立柱建物を構成する柱穴である可能性が高い。
- 第2遺構面 庄内式期と考えられる遺構面で、溝2条、土坑1基、ピットを検出した。
- 14次－8 2面の遺構面を確認した。
- 第1遺構面 奈良時代末から平安時代初頭と考えられる遺構面で、井戸、掘立柱建物などを検出した。

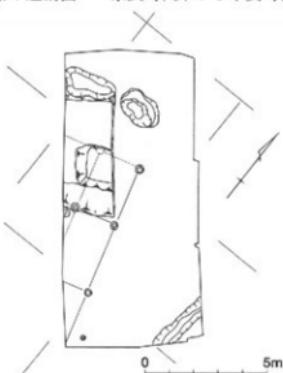


fig. 214 第14次－2調査区平面図

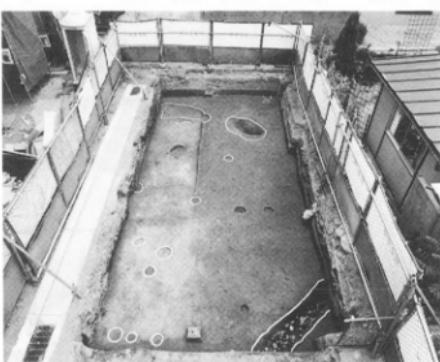


fig. 215 第14次－2調査区全景

- 第2遺構面** 溝3条、土坑1基、ピット5基を検出した。出土遺物が小片のため詳細な時期については明確ではないが、奈良時代あるいはそれ以前の遺構面と考えられる。
- 14次-9 現地表下約60~70cmで検出した奈良時代から平安時代と考えられる遺構面で、ピット、溝、落ち込み、井戸などの遺構を検出した。
- 14次-10 3面の遺構面を確認した。ただし東西方向に延びる調査区は工事の影響深度を越えるため、第2遺構面までの調査となっている。
- 第1遺構面** 中世前期の遺構面と考えられる。流路1条を検出した。
- 第2遺構面** 平安時代の遺構面と考えられる。井戸のほか、ピットを多数検出している。
- 第3遺構面** 奈良時代から平安時代の遺構面と考えられる。調査区南半で多数のピットを検出した。
- 14次-11 奈良時代から平安時代の遺物包含層である灰色シルトから須恵器片が出土しているが、それ以下の層は調査を行っていないため、遺構は検出していない。
- 14次-12 3面の遺構面を確認したが、調査区の北側1/3では第1遺構面基盤層の暗灰色砂質シルトが無く、第1・第2遺構面が同一面で検出され、また南側2/3では第2遺構面基盤層の淡暗灰色シルト質細砂が存在せず、第2・3遺構面が同一面で検出された。
- 第1遺構面** 中世の遺構面と考えられる。溝2条、土坑1基、ピット4基を検出した。

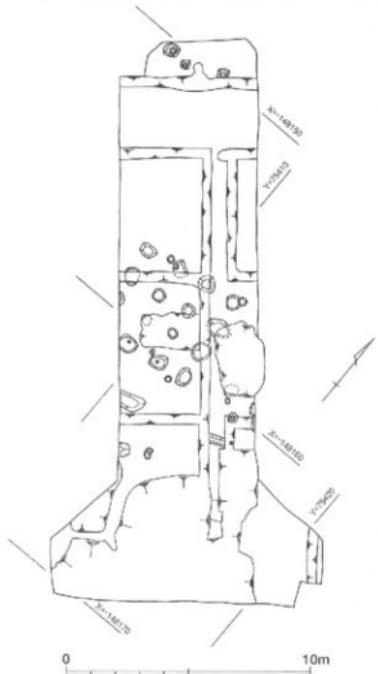


fig. 216 第14次-12調査区平面図



fig. 217 第14次-12調査区全景

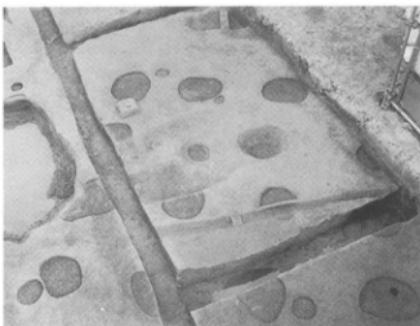


fig. 218 第14次-12調査区掘立柱建物

**第2遺構面** 奈良時代から平安時代初頭の遺構面と考えられる。掘立柱建物1棟、溝8条、ピット数基を検出した。

**第3遺構面** 庄内式期の遺構面と考えられる。溝1条、溝状の落ち込み1条を検出した。

調査区南端では第2遺構面で落ち込みと溝が検出しているが、先述したように調査区の南半では第2遺構面の基盤層が存在せず、これらの遺構はその埋土から第3遺構面の時期のものと考えられる。

14次-13 2面の遺構面を確認した。

**第1遺構面** 溝3条、畦状の隆起1ヶ所などを検出した。

**第2遺構面** 庄内式期の遺構面と考えられる。溝1条を検出した。

14次-14 2面の遺構面を確認した。

**第1遺構面** 調査区の大半が建物基礎による擾乱を受けており、一部のみに遺構面が残存していた。中世の遺構面と考えられる。調査区西部で溝1条を検出した。

**第2遺構面** 南側を中心に確認した奈良時代の遺構面で、溝3条、土坑1基、ピット4基を検出した。

14次-15 側溝設置部分の工事影響深度までの調査であったため、標高6.3mより下層については調査を実施していない。影響深度内で遺構面を1面確認し、時期不明の溝1条を検出した。

fig. 219  
第14次-22調査区  
平面図

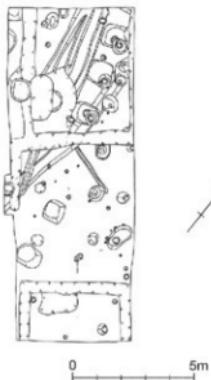


fig. 220  
第14次-22調査区  
掘立柱建物

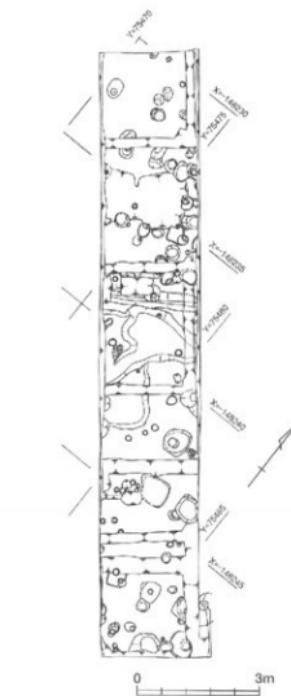


fig. 221 第14次-23調査区平面図

- 14次-16 2面の遺構面を確認した。
- 第1遺構面 奈良時代から平安時代の遺構面と考えられる。小規模な落ち込みを2基検出した。
- 第2遺構面 庄内式期の水田面と考えられる。畦畔は洪水による削平を受けていたが、5畝の畦畔が検出され、西端の水田面ではわずかに耕土が遺存していた。
- 14次-17 2面の遺構面を確認した。
- 第1遺構面 土坑1基を検出した。遺構内の出土遺物から明確な時期を比定することは困難で、周辺の調査結果などから判断すると、奈良時代の遺構面と考えられる。
- 第2遺構面 第1遺構面基盤層の下層で、黒褐色粘土を検出した。第14次-4・6調査で検出した湿地状土壤に相当することができるならば、庄内式期の水田層の可能性がある。
- 14次-18 3面の遺構面を確認した。ただし、調査区の北半約1/2は上層の流路によって削平されているため、第2遺構面以下は存在しない。
- 第1遺構面 ピット12基、井戸1基、流路1条を検出した。流路の最終埋没時期は15世紀まで下るが、他の遺構の時期は、平安時代末(12世紀)と考えられる。
- 第2遺構面 平安時代前期(10世紀)の遺構面と考えられる。ピット16基、落ち込み1ヶ所、溝1条が検出された。ピットのうちの4基は、一辺約50cmの方形掘形をもつ。
- 第3遺構面 奈良時代(8世紀)の遺構面と考えられる。ピット29基、落ち込み1ヶ所、溝4条を検出した。ピットのうちの1基は、一辺約70cmの方形掘形をもつ。
- 14次-19 奈良時代から平安時代の遺構面と考えられる。溝3条を検出した。これらの溝には、牛と人の足跡が多数残されていた。
- 14次-20 1面の遺構面を確認した。  
13世紀前半頃の遺構面と考えられる。溝を3条検出した。
- 14次-21 3面の遺構面を確認した。
- 第1遺構面 奈良時代から平安時代の遺構面と考えられる。ピット1基、溝4条を検出した。
- 第2遺構面 庄内式期の水田面と考えられる。畦畔1条、溝2条を検出した。
- 第3遺構面 庄内式期の遺構面と考えられる。井戸1基、ピット4基、溝4条を検出した。
- 14次-22 1面の遺構面を確認した。



fig. 222 第14次-23調査区全景



fig. 223 第14次-23調査区全景

古墳時代から中世の遺物を含む暗灰褐色土上面で、掘立柱建物5棟、溝4条、土坑1基、ピット10数基を検出した。

14次-23 1面の遺構面を確認した。

大型の掘形をもつものを含めて、柱穴を約90基検出したほか、土坑1基、溝2条、落込み1ヶ所を検出した。検出した遺構のうちの大半は、飛鳥時代から奈良時代のものと考えられ、ほかに中世の掘立柱建物1棟やピットがある。

3. まとめ 今回の調査は、御蔵遺跡の西半部分にある御蔵西地区について、広範囲にわたってトレーニング状の調査を実施したものである。調査区の大半が長く細い形状であるため、例えば掘立柱建物などの場合、1棟の全体を同一調査区内で検出することは困難であり、断片的な資料しか得られない場合も多い。しかし広範囲にわたって調査を実施することができたため、御蔵西地区内における御蔵遺跡のおおよその全体像を把握することができたといえる。

御蔵西地区の南東部分では、流路内あるいは洪水砂から縄文時代晚期や弥生時代中期の遺物が出土している。これらの遺物は磨耗を受けており、北側に所在する別の遺跡から流されてきたものと考えられ、御蔵遺跡内で当該時期の顕著な遺構は見られない。

当遺跡内で確実に集落が営まれるのは弥生時代末の庄内式期からであり、当該期の集落の中心は御蔵遺跡の東半部分に存在し、中央部から西にかけては水田が営まれている。

その後古墳時代においては集落は途切れるが、飛鳥時代から奈良時代、平安時代の初頭にかけて遺跡の南東部分を中心に掘立柱建物群が形成される。これらの掘立柱建物の中には大型の柱穴を持つ総柱の建物もあり、倉庫群の可能性もある。

平安時代前期以降は遺跡西半で木棺墓群や井戸等を検出しており、集落の中心が西へと移動したことが想定できる。

その後12世紀頃まで、当遺跡内で集落が営まれていたと考えられる。

遺跡中央部は全時期を通じ顕著な遺構が少なく、水田として利用されたと考えられる。



fig. 224  
御蔵遺跡遠景

## 1. はじめに

御藏遺跡は長田区の中央部を流れる苅藻川の左岸の沖積地に立地する、縄文時代から中世の複合遺跡である。

今回の調査は市営住宅建設工事に伴うもので、住宅に併設される駐輪場建設箇所及び、住宅本体に取りつく埋設管敷設箇所において調査を実施した。なお、住宅建物本体箇所については第3次調査を実施しており、古墳時代終末期から平安時代前期の掘立柱建物などの遺構を数多く確認している。

fig. 225  
調査位置図  
1 : 2,500



## 2. 調査の概要

調査はA～F区に区分して進めた。A～C区が駐輪場建設箇所、D～F区が埋設管敷設箇所にあたる。

## 基本層序

現地表面以下の上層は、上層より現代盛土、旧耕土層、遺物包含層の順で、遺物包含層の下層上面が造構面にあたる。当調査において生活面として捉えられたのはこの面のみである。造構面の基盤層は砂混りの砂質土層で、現地表下40～60cmと比較的浅い位置に存在するため、沖積によって形成された微高地にあたるものと考えられる。

## 検出遺構

掘立柱建物の一部と考えられる柱穴や溝、落ち込みなどが、密集した状況で検出された。第3次調査と同様に、大半が古墳時代終末期から平安時代前期に属するものと考えられる。また、A・B区の西半部に古墳時代初頭に属すると考えられる落ち込み状造構が存在しており、その埋土が後世（古墳時代終末期以降）の遺構の基盤層となっている。

## 出土遺物

遺物は遺物包含層、造構内から多く出土しており、古墳時代終末期から平安時代前期のものが多いため、古墳時代初頭の落ち込み状造構からの出土も相当量みられる。遺物の大半は土器類で、須恵器の壺や土師器の甕などの日常雑器類が多い。